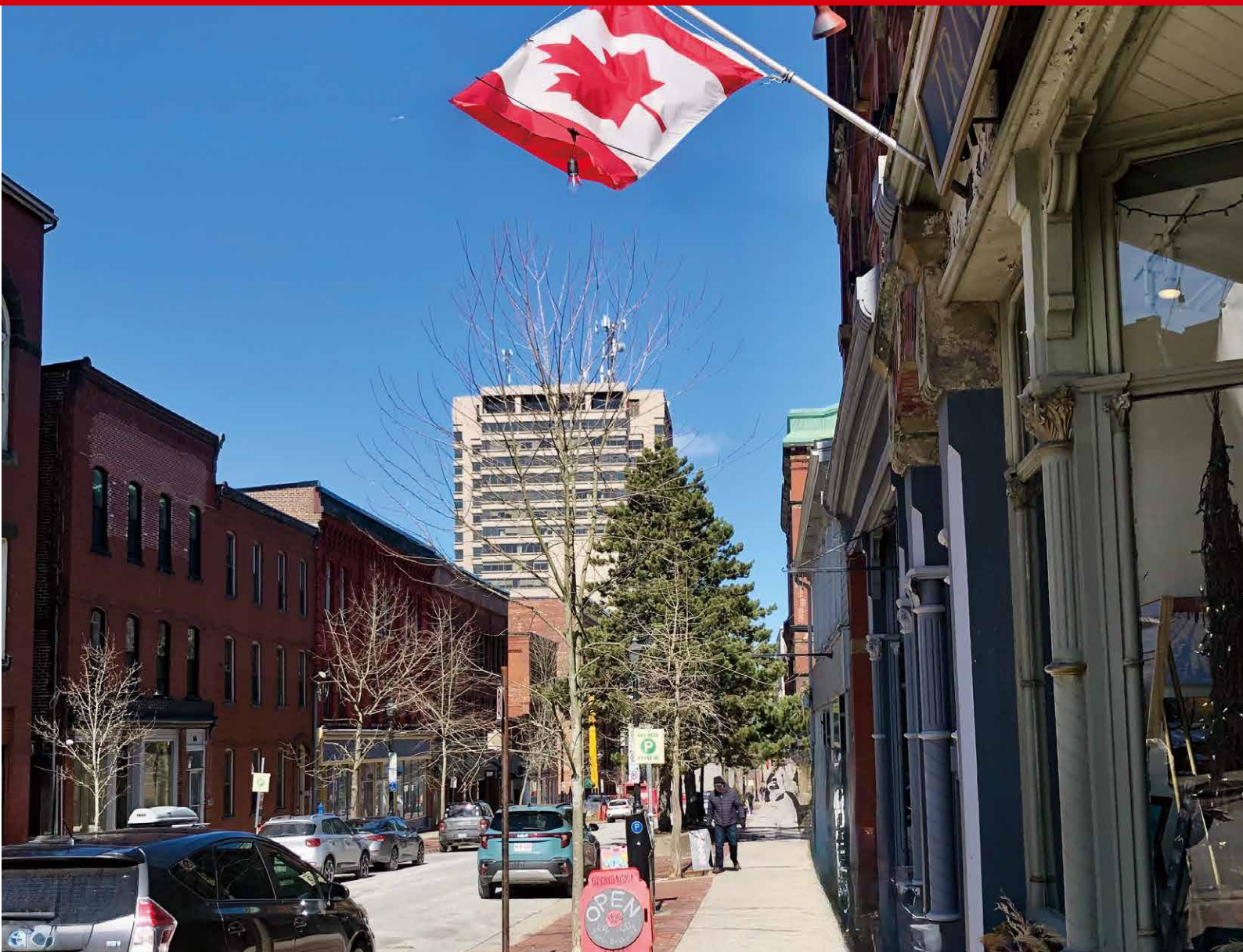




2025 年度

国際社会実習報告書



2025年度
国際社会実習報告書



国際社会実習報告書

2025年度

【Contents】

発刊にあたって	3
令和7年度「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」の実施について.....今井 典子.....	4
国際社会実習の振り返り.....西谷佳笑.....	11
国際社会実習の振り返り.....橋本伊吹.....	13
国際社会実習の振り返り.....和田夏香.....	16
国際社会実習の振り返り.....西條二子.....	19
Report on the 2025/26 Guided International Field Study Program English as an Additional Language (EAL) in Canadian Public Schools 国際社会実習（海外調査実習 II）.....Dana Lingley.....	22
A Study of EAL Practices in Saint John, New Brunswick, Canada ...石川大和.....	32
「国際社会実習（スタディ・ツアー）I」2025 年ハルピンスタディツアー.....高橋 俊.....	44
日中関係—反日感情について—.....西村美紀.....	46
中国の大学生活と急変する社会 —ハルピンスタディツアーに参加して—.....坂下康信.....	52
哈爾濱スタディツアーに参加して.....池上吉乃.....	57
初めての海外、初めての中国.....山崎智可.....	60
哈爾濱・北京スタディーツアーに参加して.....筒井優衣愛.....	63
「国際社会実習（スタディ・ツアー）I」2025 年香港スタディツアー報告 ...高橋 俊.....	65
語らぬ「証人」に耳をすませば —2025 年 12 月の香港等におけるモノを介した歴史の伝え方—.....廣瀬奏人.....	66

発刊にあたって

高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース 2025 年度「国際社会実習報告書」をお届けいたします。2020 年度から 2021 年度にかけてはコロナ禍の影響により実習が実施されませんでした。2022 年度には 3 年ぶりに実習が再開され（同年度は 1 件）、2023 年度には 3 件、2024 年度には 2 件、そして 2025 年度には 4 件の実習が実施されました。実習の機会も増加しつづけ、ようやく活気を取り戻してきています。各実習の取り組みを紹介します。

3 回目となったインドネシア・ブラビジャヤ大学との連携による「国際社会実習（オンライン海外調査実習Ⅰ）」には 4 名が参加し、ブラビジャヤ大学での日本語教育支援や日本文化紹介を通じて現地の学生と交流を深めました。参加学生 4 名による、多様な視点からの実践記録が収められています。

カナダ・ニューブランズウィック州における国際社会実習（海外調査実習Ⅱ）では 1 名が、ASD-S（アングロフォン・サウス教育区）の公立学校における移民・新入国者向け英語教育（EAL）支援プログラムを調査し、現地調査を通じて得られた、専門的な知見について報告しています。

「ハルピン・ツアー」（「国際社会実習（スタディ・ツアーⅠ）」）には 5 名が参加し、哈爾濱師範大学（ハルビン師範大学）との交流や北京散策、各自の関心に基づいた現地調査を行っています。学生たちが中国の『いま』を肌で感じた、率直な洞察が綴られています。

そして「香港スタディ・ツアー」（「国際社会実習（スタディ・ツアーⅠ）」）では、1 名の学生が歴史的建造物や博物館の調査、ローンボウルズ体験などを通じて、多角的に香港の歴史と現状を考察しています。それぞれの学びを収めた報告を、ぜひご一読ください。

「国際社会実習」は、実習内容や実習先、学修レベルに応じて、以下の 5 つの区分に分かれています。国際社会コース開講科目ではありますが、コースや学部の枠を超え、全学に開かれた科目となっています。

スタディ・ツアー	外国語実習	国内調査実習
海外調査実習	フィールド・リサーチ	

こうした機会を通じて、学生たちが「リアルな体験」や、「当たり前が当たり前ではない」と気づく経験、そして「見たことのない景色」に出会うことを、今後も多くの学生に期待したいと思います。

2026 年 6 月

高知大学人文社会科学部
人文社会科学科国際社会コース長
遠山 茂 樹

令和7年度「国際社会実習(オンライン海外調査実習)」の実施について

今井 典子(人文社会科学部 国際社会コース)



はじめに

オンライン形式での「国際社会実習(海外調査実習)」は、2025 年度で 3 回目の実施となった。本実習の受け入れ先であるインドネシアのブラビジャヤ大学(Universitas Brawijaya:UB)とは、「国際社会実習」に加え、自律学習支援センター(OASIS)で実施している「英語・日本語」によるパートナーシップ・プログラムや、ゼミナール学生が参加する学生間研究交流(Collaborative Online International Learning: COIL)などを通じて、これまで継続的な交流を深めてきた。

本オンライン実習プログラムは、学生が自身の興味・関心のある分野、特に日本語教育に関する実践的な学びを深めることを目的としている。具体的には、協力校の日本語クラスの授業参観および授業、日本語担当教員のアシスタント業務、日本語学習者への支援などを通じて、実践的な経験を積む機会を提供する。

本実習を通じて、参加学生は主体性や自律性、計画力、実行力、課題解決力といった社会で求められる能力を向上させ、将来のキャリア構築につなげることが期待される。加えて、海外での実習では、多様な文化に触れる貴重な機会となる。本実習は、協力校の学生にとっては日本文化や高知の魅力を知る機会となり、一方で、高知大学の学生にとっては、協力校の国の文化を学ぶ貴重な経験となる。このような相互交流を通じて、今後の留学や国際交流のさらなる活発化が期待される。

1. 実習開始に向けて

「国際社会実習(海外調査実習)」への参加に向けて、7 月 2 日(水)昼休みに、自律学習支援センター内のマルチメディア教室で説明会を実施した。説明会では、本実習がオンラインで 50 時間実施されることに加え、高知大学における対面での事前・事後学習が 10 時間含まれること、これらの時間には準備時間も含まれること、また、実習の具体的な内容について説明を行った。説明会に参加した 4 名全員が履修登録を完了し、実習への参加が確定した。

実習開始に先立ち本年度は、9 月 24 日(水)～26 日(金)に UB を訪問する機会を得た。訪問中、本年度も「国際社会実習」を引き受けてくださった飯塚啓先生、そして日本文学科長の Santi Andayani 先生と本年度の取り組みに関して詳細なうち合わせを行うことができた(写真1参照)。

事前の打ち合わせ会では、学生の参観授業科目、そして実際に授業をさせていただく授業科目、それらの日程などを調整し決定することができ、実習のイメージがより具体的になった。また、授業をする予定科目の中の「文化紹介」（3 年生対象科目）の授業で取りあげる内容を相談し、テーマを絞ることができたことで、高知大生にとって準備がしやすくなったと感じた。

今回の訪問中（25 日）に 2 年生の「聴解会話」の3つのクラスを参観する機会を得た。ちょうど日本語実習で UB に滞在していた 4 名の高知大生が授業の後半に模擬授業を行っていた。昨年度の「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」に参加していた学生の一人が、本年度実際に対面で実習させていただいており、オンラインからオフラインでの授業へというつながりもできており、学生にとってもよい経験になっていた。

この 2 年生の「聴解会話」の授業は、本年度「国際社会実習」に参加学生が授業をする科目でもあり、UB の学生の雰囲気や様子を肌で感じることもできた（写真 2 参照）。



写真 1 打ち合わせの様子



写真 2 2 年生「聴解会話」の授業の様子

オンラインの事前打ち合わせを 9 月 30 日（火）12:15（インドネシア時間 10:15）より、Zoom を通じて実施した。この打ち合わせには、実習に参加の高知大学生 4 名に加え、UB から飯塚啓先生、Santi Andayani 先生、Ni Made Savitri 先生の 3 名にご参加いただいた。事前に、学生のプロフィール（参加動機等を含む）を先方大学に送付していたが、この場が両者にとって初めての顔合わせとなった。オンライン上とはいえ、直接顔を合わせて話す機会を持てたことで、学生にとっては実習に向けた不安をある程度和らげることができたのではないと思われる。

2. 国際社会実習の概要

2.1 対面事前学習（3 時間）

参加学生全員のスケジュールを調整し、2 学期開始前ではあったが、9 月 30 日（火）の UB とのオンライン顔合わせ終了後、自律学習支援センター内マルチメディア教室において対面による事前学習会を実施した。

事前学習会では、あらかじめ課題として提示していた「インドネシアおよびブラビジャヤ大学に関する興味のあるトピック」について各自が調査を行い、その成果を発表・共有した。発表内容としては、言語（インドネシア語の複合語）、人口、地理、日本語学習、食文化、年中行事、教育制度、祭り

などが挙げられる(写真3参照)。いずれの発表も、写真やイラストを効果的に用いた分かりやすいプレゼンテーションであった。

参加学生は互いの調査結果を共有することで実習への理解を深めるとともに、発表活動を通して実習に対する期待をさらに高めていた。また、インドネシアの文化的背景を理解したうえで、実習先で予定されている3年生対象の「文化紹介」授業に活かすことができるとの意見も見られた。その後、「文化紹介」で担当する内容について具体的な打ち合わせを行った。



和田 夏香



西條 二子



橋本 伊吹



西谷 佳笑

写真3 事前指導での発表の様子

2.2 オンライン実習(50時間)

オンライン実習は、2025年10月16日(金)から11月下旬までの期間に実施された。実習開始までの期間は、事前に割り振られていた「文化紹介」で発表する内容について各自がリサーチを行い、準備を進めた。

本実習では、ブラビジャヤ大学(UB)の2年生を対象とした「聴解授業」を参観した後、「聴解授業」および3年生を対象とした「文化紹介」の授業を担当した(表1参照)。昨年度と比較すると、今年度の実習期間は短縮されたものの、その分、より集中した学習環境のもとで実施することができた。実習期間中は、日本語教育の現場において実践的な経験を積む貴重な機会となった。

表 1 実習の担当クラスと授業科目

学生氏名 (所属) (学年)	和田 夏香 国際社会コース 2 年	西條 二子 国際社会コース 2 年	橋本 伊吹 国際社会コース 2 年	西谷 佳笑 国際社会コース 2 年
参観授業 および 担当クラス 授業科目名	聴解会話 2E 文化紹介 3C	聴解会話 2B インターナショナル クラス 3E	聴解会話 2C 文化紹介 3B	聴解会話 2A 文化紹介 3B

(補足) 数字 (1・3) は学年、アルファベットはクラス名を示す。

2.3 対面事後学習 (7 時間)

本実習の総括として、報告会および審査会を 2025 年 1 月 15 日 (木) 13:10 より実施した。事後学習の主な目的は、実習を通じて得た経験や学びを振り返り、それらを将来のキャリアにどのように活かすかを考察することである。具体的には、参加学生がそれぞれの実習内容、取り組んだ活動、学んだこと、見出した課題、および今後の対応策についてプレゼンテーション形式で発表を行った (写真 2 参照)。



和田 夏香



西條 二子



橋本 伊吹



西谷 佳笑

写真 4 報告会・審査会の様子 (1 月 15 日実施)

同報告会には、ブラビジャヤ大学より飯塚先生、マデ先生、ロスタ先生の 3 名が参加された。また、

高知大学からは、国際社会実習の指導経験が豊富な橋本由紀子先生ならびに、高知大学グローバル教育支援センター日本語総合コースにおいて留学生対象の日本語科目を担当している片山順子先生が参加された。さらに、日本語教育実習に関心を有する学生 2 名も参加した。

各プレゼンテーション後には、ブラビジャヤ大学の飯塚先生より、各発表者に対して実習を振り返ったうえで課題や改善点を含む講評がなされた。全体の発表終了後には質疑応答の時間を設け、参加学生同士が互いの経験を共有しながら意見交換を行った。質疑応答では、実習中に直面した困難やその対応策、今後の課題について具体的な質問が出され、相互の学びを深化させる機会となった。これらの発表を踏まえ、学生は実習報告書の作成に取り組んだ。報告書には、実習を通して得た学びや気づき、今後の課題に対する考察が詳細にまとめられ、実習の成果として提出された。なお、実習を通じて得られた具体的な学びの内容については、後述の学生報告書にて詳述している。

2.4 国際社会実習報告会からの総評

以下に、国際社会実習報告会に参加いただいた片山順子先生(1)、橋本由紀子先生(2)からのコメントを掲載する。

(1) 片山順子先生からのコメント

国際社会実習の報告会において、日本語教育および文化紹介を行った 4 名の報告を聞いた。オンラインでの日本語授業は、対面以上に神経を使うものであり、学習者の反応が見えにくい中で、スライドや話すスピード、ネットの不安定さにも注意しながら進める必要がある。そのような状況の中でも、実践後に課題や改善点を丁寧に振り返り、次の授業に活かしていた姿勢は非常に素晴らしいと感じた。さらに、海外の学生と接する中で、日本とは異なる考え方や捉え方を具体的に体感できたことも大きな成果であり、今後の学びや活動にぜひ活かしてほしい。

(2) 橋本由紀子先生からのコメント(報告順で掲載)

橋本伊吹さん：

常に笑顔が印象的であった。日本の文化紹介には、大阪の紹介や関西弁を導入し、また、日本の祭りも含め、学習者が興味を持つだろう内容を努力して準備したことが、明らかで、好感が持てた。指導方法の工夫では、学習者の声が聞き取りにくく、反応が把握しにくかったことから質問の方法を変え、克服したことが報告され、改善方法や対処方法が即座に出てくるのは、機転が利き、様々な場面に対処できる教員としての資質を有していると感じた。授業が一方的になったなどの反省点を十分に把握し、改善努力をしたことが報告され、好感が持てた。自分自身が笑顔を絶やさず楽しみながら教えていることが感じられた。発表スライドの構成を体系化し、目的、方法論、実際の授業に関して、反省点、改善点にまとめると説得力が出た。

和田夏香さん：

プレゼンのスライドの構成がよく、分かりやすかった。目標、実施内容、反省点、を述べ理論的に発表を進められたので、説得力があった。自身の工夫として、スライドの文字数を減らす、文を短くす

る、クイズ形式にする、など具体的に述べ、授業風景が想像できた。学びでは準備を十分にすることを上げ、自己の経験が、今後うまくいかされるであろうと期待できた。他の学生に比べ、声の調子やトーンが少しおとなしすぎて、学習者に注意を向けてもらうためには、大きな声でテンポよく話す練習が必要である。しかし、飯塚先生の助言を十分に取り入れ改善していたのが、素直で多くを取り入れるという伸びしろが大きいと感じた。

西谷佳笑さん：

授業内容が興味深かった。日本の文化紹介で、冠婚葬祭や宗教についてと少し硬いタイトルを選び、分かりやすくするのに苦勞するのではないかと思ったが、学習者のほうでは心配したほど抵抗はなかったことが報告された。そこで異文化の場面ではオープンにしても良いと学んだのではないかと思う。また、アニメ文化の紹介を含め、若者に興味を持ってもらえる内容を混在し、バランスの取れた内容の授業ができたのではないかと感じる。また、失敗から学び、改善を重ね、回を重ねるごとによくなるのが感じ取れた。声がクリアで、聞き取りやすく、教員に向けた資質を有している。ゆったり、堂々と、冷静に判断し、対処方法を思い浮かべることができる大きな器の持ち主だと感じた。発表スライドの文字数を減らすとすっきりとしたと思う。

西條二子さん：

少し発表でも緊張していたが、時間がたつにつれて回復した。現地の授業での様子が予想できた。機器の不具合や、ビデオを見せながらの授業を準備していたが、うまく動画を見せることができなかったときはパニックになったと察するが、それを経験し、ケースバイケースの対処方法を考え、回ごとに工夫を重ね、学習者に好かれる教員になることができると期待できる。

総評

全般的に、実習を通しての大きな目標をたて、回ごとの各論的目標を立て、それらを達成するための具体的な方法論をあらかじめ準備しておくことをお勧めする。そして最終的に、大きな目標はどの程度達成できたか、工夫をして成功したこと、うまくいかなかったこと、うまくいかなかった理由は何だったか、そのための改善点、常に心がけていたこと、オンラインならではの注意点、逆にオンラインならではのメリット、この実習を今後どのように自分の成長に生かすか、これから実習をする後輩への助言、などをまとめておく。発表もまとまり、報告書も論理的でしっかりしたものになると思う。

4 名とも、授業内容を工夫し、学習者が楽しく学べる環境と、常に笑顔で心掛け、将来日本語教員として期待できる資質を持っていると感じた。ぜひ、インドネシアに行き、現地での実践を積むと、経験知が増え、予測せぬ出来事への対処方法もすぐに思い浮かぶので、経験を積むことをお勧めする。

おわりに

本年度は、今回の実施に向けた準備の一環として、2025 年 9 月 24 日（水）から 26 日（金）にかけてブラビジャヤ大学を訪問し、現地教員と対面で協議を行うことができた。この事前協議により、実習の目的や内容について相互理解を深めることができ、円滑な実施につながったと考えられる。

訪問期間中には、複数の日本語クラスの授業を見学するとともに、2025 年度の実習に向けた具体的な打ち合わせを行った。こうした対面での事前調整は、これまでの取り組みにはなかった点であり、実習の質的向上に寄与するものであった。

参加学生は、次年度に対面での日本語教育実習を予定しているが、その前段階として、実際の授業を参観し、45～50 分間の授業を一人で担当する経験を得られたことは、大きな意義を有する。学生からは、短時間の模擬授業の経験はあったものの、このようにまとまった時間を単独で担当する機会は初めてであり、多くの課題を具体的に認識する契機となったとの声が聞かれた。

以上より、本オンライン実習を通して得られた経験や学びは、学生にとって極めて価値の高いものであったといえる。実習を通じて得られた気づきや省察は、今後の対面による日本語教育実習において活かされ、さらなる学びの深化へとつながることが期待される。本実習で培われた知識・技能および省察的視点は、学生の今後の学修およびキャリア形成の基盤となるものである。

謝辞

この度の実習に際して、ご協力いただきましたブラビジャヤ大学の関係者の多くの皆様に、心より感謝の意を表します。2023 年 3 月、2024 年 3 月、2025 年 9 月（写真 5 参照）の3度にわたる訪問では、直接お会いし対話の機会を賜り、貴重な意見交換をさせていただきました。このような経験は、実習の質を高める上で非常に重要であり、深く感謝しております。



写真 5 2025 年訪問時の写真

（左から Agus Budi Cahyono 先生、Didik Hartono 副学部長、Yusri Fajar 副学部長、
今井、渡辺裕子先生、Santi Andayani 先生、Ni Made Savitri 先生）

➤次頁より、参加者 4 名の今回の実習報告書を掲載している。

1. 実習内容

今回の国際社会実習で実施した内容は、事前学習、授業見学、聴解・会話の授業実践、文化紹介である。

事前学習では、主に日本の祝日や若者文化について調べ、発表を行った。特に若者文化については、学習者が学生であることから、関心に近い文化を知ることが円滑なコミュニケーションにつながるかと考え、このテーマを選んだ。また、調べた内容をパワーポイントにまとめ、発表を行った。自分自身でインドネシアについて調べたり、ほかの受講生の発表を聞いたりすることで、学習者の背景や自分の興味関心が明らかになった。

授業見学では、Google Meet を用いてロスタ先生の授業を見学した。『みんなの日本語初級Ⅱ』第 43 課、第 44 課の練習 A・C および会話を見学した。その 1 週間後と 2 週間後に、初中級クラス 2 年生約 20 名を対象に、実際に授業を実施した。授業時間は 50 分程度であり、私は第 45 課と第 46 課の練習 C と会話を担当した。先生の授業や、過去に実習に行った先輩方の授業を参考にしながら、スライドや教案を作成した。授業展開では、日本文化に関連したアニメや食品サンプルを取り入れ、学習者の理解度を確認するとともに、自分なりの工夫を取り入れた授業を行うことを心がけた。

文化紹介は、飯塚先生のクラスで 3 年生約 25 名を対象に、30 分程度の時間で行った。私は、日本の祝日や冠婚葬祭について紹介した。特に成人式の振袖や結婚式については、学習者が強い関心を示していた。また、インドネシアの文化と比較して話してもらう活動を取り入れ、異文化理解の視点を意識した。

2. 気づいたこと、学んだこと

授業見学を通して気づいたことは、教師による「質問はありますか」、「わからない単語はありますか」といった声掛けの多さである。そのため、私自身も事前に既習語彙を調べ、新出語彙については、やさしい日本語や英語で言い換えるなどの準備を行った。

授業実践および文化紹介を通して学んだことは、主に 4 つある。1 つ目は、リモート授業では学習者の反応を把握しにくいという点である。Google Meet を使用していたが、スライドと教室全体の様子を同時に確認することが難しく、操作の関係上、画面を見続ける場面が多くなってしまった。その結果、学習者一人ひとりの表情や反応を十分に捉えることができなかった。2 つ目は、機器や通信トラブルへの対応の重要性である。実際の授業では想定外のトラブルが起こる可能性があるため、それを前提として準備する必要があると感じた。そのため、教案には時間的な余裕を持たせた計画を書いておくことが重要である。3 つ目は、時間配分の難しさである。1 回目の授業では練習量が少なかったため、2 回目では導入と練習を増やしたが、結果として時間が足りなくなってしまった。また、1 回目に比べて 2 回目は話す速度が遅くなっていたことから、話すスピードも含めた調整の必要性を感じた。4 つ目は、教科書分析と文法分析の重要性である。授業を実施する中で、教科書に

書かれている内容をそのまま扱うだけでは不十分であり、教師自身が文法項目の意味・用法・使用場面を正確に理解しておく必要があると強く感じた。特に、学習者が誤用しやすい点や、母語の影響を受けやすい表現が含まれているかを事前に分析することが重要である。そのような分析を行うことで、学習者がどこでつまずきやすいのか、どの部分を重点的に説明すべきかが明確になり、理解を助ける授業につながると学んだ。

3. 今後に活かしたいこと

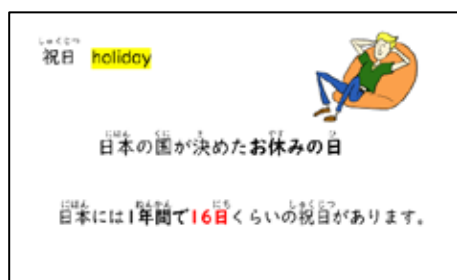
今回の国際社会実習を通して得た学びを、今後の日本語教育に以下の 5 点で活かしていきたい。1 つ目は、文法項目について、教師である自分が責任を持って整理し、押さえるべきポイントを明確に提示することである。文法は学習者にとって理解が難しい部分であり、教師側の理解が不十分なままでは、学習者の混乱を招いてしまう。今後は、文法の意味・用法・使用場面を自分の中で整理した上で、誤用しやすい点や注意点を意識した説明ができるようにしたい。2 つ目は、導入と発展のバランスを意識した授業構成である。実習では、導入や練習量を増減させることで時間配分が大きく変わることを実感した。今後は、授業全体の流れを見通しながら、活動ごとの所要時間を意識し、学習者の理解度に応じて内容を柔軟に調整できるようにしたい。3 つ目は、教材分析である。使用する教材を事前に分析し、どの語彙や文法が既習であるかを把握することは、授業を円滑に進めるために欠かせない。4 つ目は、トラブル対応の準備である。リモート授業では、機器や通信の不具合が突然起こる可能性がある。そのような場合でも授業を継続できるよう、代替となる活動や説明方法を事前に用意しておくことが重要である。今後は、複数の進め方を想定した教案作成を心がけたい。5 つ目は、柔軟な授業運営である。実際の授業では、教案通りに進まない場面が多くあることを実感した。そのため、教案はあくまで目安と捉え、学習者の反応や理解度を見ながら、活動内容や進行を調整できる力を身につけたい。

学習者に寄り添った授業を行うことを、今後の模擬授業や実習に活かしていきたい。

<使用した授業スライドからの抜粋>



<文化紹介で使ったスライドからの抜粋>



1. 実習内容

実習では、事前学習としてインドネシアについての調査と発表、聴解授業の見学を行い、授業の進め方について学んだ。その後、模擬授業を 4 回オンラインで担当し、実習報告を通して実習での学びを振り返った。事前学習では、インドネシアのお祭りについて調査し、日本のお祭りとの共通点や相違点を比較した。模擬授業では、授業の前半 45 分を担当し、聴解授業を 2 回、文化紹介を 2 回行った。聴解授業では『みんなの日本語 初級Ⅱ』の「会話」と「練習 C」を担当した。文化紹介では、「日本の祭り」をテーマに、祭り文化の特徴や日本全国の祭りをやさしい日本語で解説した。実習後は報告会を行い、活動内容を振り返り、先生方からのアドバイスをもとに今後の課題を考えた。

2. 学習者の目標は達成できたか

聴解授業では、「日本語で自分のことをたくさん話することができる」を目標に授業を計画した。教科書に登場した話題に沿った質問を複数回行い、学習者に自分の意見や体験を語ってもらう予定であった。しかし、オンラインでの大人数授業のため学習者の声がほとんど聞き取れず、個人への質問を聞き取り返答することが困難であった。これを受けて 2 回目の授業からは目標を見直し、日本語で質問し学習者の挙手やジェスチャーで回答を確かめる方法を実施した。「話することができる」という当初の目標は達成できなかったが、学習者と日本語を使ってコミュニケーションをとることはできた。反省点としては、実習期間中にパソコンの音響システムの不備を改善するなどの適切な対処ができなかったことが挙げられる。

文化紹介では、「日本の祭りの魅力について語ることを目標に授業を行った。学習者に日本の祭りについて興味をもってもらい、今後の日本語学習のモチベーション向上につなげるために、教師自身が明るく楽しく、熱意を持って魅力を語ることを心がけた。実際に学習者に語ってもらうような活動はできなかったが、複数のトピックを用意して日本の祭りの特徴を伝えられたと考えている。また文化紹介では、自分の言葉で思いを伝えるために、教案の教師の言葉を細かく作成せずに授業を行った。そのため、語彙コントロールができず教師の説明が多くなってしまったことを反省している。一方で自分の言葉で授業を行い学習者の反応を見ることができた点には満足している。

3. 実習を経てできるようになったこと

この実習を通して、オンラインツールを用いて海外の日本語学習者へ日本語を教える方法を学んだ。またこの実習では、数十人のクラスを担当することで、大人数のオンライン授業の難しさを痛感した。オンラインでは、学習者個人の様子や反応を見ることが難しく、対面の授業では実施できるようなグループワークや机間巡視を行うことができなかった。この経験からオンライン授業をするうえでの注意点を学んだ。今後のオンライン授業では、音響やカメラのシステムを確認する、学習者を指

名するために名簿を入手しておく、スライドを使用するための端末と学習者の反応を見るための端末の2台を用意するなどの事前対策を徹底したい。オンラインツールを使いこなすことにはまだ課題が残るが、対面が難しい学習者や海外で学ぶ学習者に向けて授業を行えるようになれば、学習者のニーズにも幅広く対応できるようになると考える。

4. 今後にどのように活かしていくか

私はこの実習の経験から3つのことを学び、これらを今後の授業作りに活かしていきたいと考える。

1つ目に、聴解授業と文化紹介で教案の作り方を変えたことにより、教案を作りその流れや言葉を事前に頭の中に入れておくことの重要性を学んだ。教案を見すぎると教案通りに進めることに必死になり自然な授業ができないが、教案を用意しないと語彙コントロールができず分かりにくい日本語や unnecessary 説明をつけ学習者を混乱させてしまう。このことから、教案は用意するが授業では頼りすぎないことを心がけたいと思った。今後は、教案を授業の台本とするのではなく自分の頭の中を整理するための道具として使用し、教案の言葉を自分の言葉として学習者に届けるために、時間を測りながら入念に授業の予行練習をしていきたい。

2つ目に、文化紹介は、ただ日本の文化を押し付けるものであってはならないということを学んだ。今回の文化紹介では、一方的に日本の事ばかりを話してしまったことを反省している。実習後の報告会では、導入でインドネシアの文化についても紹介すると日本の文化と比較しやすく興味を持ちやすいというアドバイスをいただいた。私自身、インドネシアの文化について調べるうちに日本と似ている部分や日本にはない魅力を知り、文化比較の面白さを実感した。学習者の出身国と比べ、日本の良さを発見しながら出身国の良さも再発見する、お互いの国への親近感とリスペクトを高めるものとして、両国の魅力を伝える文化紹介を行っていききたいと思った。

3つ目に、学習者が授業に参加しやすい環境づくりに努めることの大切さを学んだ。今回のオンライン授業では学習者との距離感がつかみにくく授業の進行で精一杯になってしまったため、教室の雰囲気や学習者の様子を見ることができなかった。そんな中で、授業を受ける学習者の反応が教師側の一番の心の支えになった。ブラビジャヤ大学の学習者は私の質問に大きくうなずいたり手でハートを作ったりして、授業中にたくさんのリアクションをくれた。自分の至らなさを実感しつつも、温かな反応をくれる学習者のおかげで、最後まで笑顔で授業をやり遂げることができた。しかし今後は教師である私自身が、学習者が発話しやすい場面を提供し、教室の環境を良くするような雰囲気づくりを行っていききたいと考える。学習者から話題を引き出し、教師や学習者同士の会話を通して新しい言葉や知識を学んでいけるような授業を行いたい。

今後も、オンラインでの教授法や、オンライン授業を行う上でのシステムの知識を身に付け、国内外問わず多くの日本語を学ぶ学習者と交流していきたい。

聴解授業スライド

はな　ことば　い
話し言葉で言いましょう！　Lv.★★

A：ミラーさん、きょう　来るかな。
B：来るはずですよ。きのう　電話が　あったから。
A：じゃ、大丈夫だね。

かんさいべん　い
関西弁で言いましょう！　Lv.★★★

A：Bさん、大学　どないしてんの。
B：先月　授業が　始まった　ばっかり　やから、
まだ　よう　わからへんわ。
A：そうかいな。
初めは　大変かも　しれへんけど、　頑張るや。
B：おおきに！

文化紹介スライド

にほん　まつ
日本の祭りのここがすごい！①
でんとう　れきし
伝統と歴史がすごい！



たこ焼き



外はカリカリ、
中はトロトロ

1. はじめに

この国際社会実習に参加した理由は、実際の日本語学習者に対して日本文化を紹介し、日本語教育において教師としての実践的な経験を積むことを目指していたためだ。また、得られる知識や学びを今後の教育実習やインターンシップに活かしたいと考えている。私自身、ゼミナールでは日本教育に関して一切学んでいない。そのため、レベルアップの機会を求めて国際社会実習に参加した。

本実習はインドネシアのブラビジャヤ大学の日本語クラスで オンライン形式で行われた。活動は「事前学習」、「授業見学」、「文化紹介」、「日本語授業」、「実習後発表」の五つで構成されている。「事前学習」ではインドネシアの文化を理解するために食文化、祝祭日、冠婚葬祭などの特徴を整理しパワーポイントを作成して実習生同士で発表を行った。「授業見学」では、ブラビジャヤ大学の日本語クラスにおいて、飯塚先生（ブラビジャヤ大学日本担教員）が教える授業を見学した。「文化紹介」は、日本の「食文化」を取り扱い、和食や一汁三菜、いただきますなどの挨拶の文化を紹介した。「日本語授業」は、『みんなの日本語 II』の 45 課と 46 課の「会話」と「練習 C」を、見学时と同様に実施した。「実習後発表」は、実習を通じて得た気づき、考察などをブラビジャヤ大学及び高知大学の教員などと共に振り返りを行った。他の生徒の発表から授業デザインについての学びがあった。

2. 実習を通じて学んだこと・考えたこと

2.1 事前学習について

インドネシアの基本情報、食文化や教育制度・インフラに関して調査した。群島国家で地域差が大きく、教育やインフラに格差があることを学んだ。公用語はインドネシア語だが地域語併用の複言語環境が一般的であり、教育制度は省庁分立で、ICT 推進も接続格差への配慮が必要であると知った。他学生の発表の中では、国民性にも触れられていた。今井先生からの話の中で、「時間の感覚には日本人とかけ離れている価値観がある」というものがあった。その点も興味を持った。

2.2 授業見学について

これまで海外で日本語教師の授業を見学した経験はなかった。人災の学習雨者の反応や授業の進め方、未習語彙への対応や反応に強い関心を持っていた。実際の見学を通じて、質問への迅速な対応に必要な事前準備、学習者の真剣な姿勢などを学んだ。実践的理解を深めることができ、今後役に立てようと思った。

2.3 文化紹介について

食文化を紹介した際には、クイズを取り入れることで学習者の関心を惹く工夫を行なった。私の授業観として、笑顔になる人が1人でも多い環境を作るというルールがある。そのため、今回のオン

ラインでは学習者自身が考えるという機会を十分に用意し、それを引き出す点を意識した。「ごちそうさまでした」「いただきます」と言った文化は新鮮だったようで、ジェスチャーを交えてクラス全体で楽しむことができた活動であった。一方で、文化紹介は単なる情報提供にとどまってしまった。学習者が活動を通じてこれまで学習した文型や表現を復習し、新たな語彙やフレーズを習得する機会にはならなかった。語彙コントロールができておらず、「やさしい日本語」を用いなければならなかったと反省している。

2.4 日本語授業について

これまで長時間の日本語授業を担当した経験はなかった。今回はオンラインで海外の学習者を対象としたため緊張を感じていた。具体的には、飯塚先生の授業見学で学んだ進め方や話し方を取り入れ、発言予定の言葉を繰り返し練習した。大きなミスなく授業を終えることができたが、自分ならではの授業スタイルを模索する必要性を感じた。クイズや、会話本文の内容理解をする時間を確保するという工夫を行なったがアレンジする力が不足していると感じた。学習者にとって印象に残る授業を提供するためには、試行錯誤を重ねることが不可欠と学んだ。

3. これからの日本語教育活動について

本実習を通じて、授業の進め方や語彙コントロールの難しさ、オンラインで日本語教育を行う難しさを学んだ。日本国内での模擬授業に対するハードルが下がり、大きなアドバンテージとなった。生徒の反応が画面上ではなくはっきりと把握でき、机間巡視もできる。現段階では、国内で実習をすると考えているため本実習で得た経験を多いに役立てたい。

<授業で使用したスライドからの抜粋>



<文化紹介 スライドの抜粋>

ぐあい	• condition
1 具合	
もう わけ	• I'm sorry.
2 申し訳ありません。	
3 少々お待ちください。	• Just a moment, please.
4 お待たせしました。	• Sorry to have kept you waiting.
5 向かいます	• Head for

クイズ

- ようす
- ① ガスレンジはどんな様子ですか
- ② ガスレンジは今までにこわれたことがありますか
- がいきや なんじ く よてい
- ③ ガス会社の人は何時に来る予定でしたか

はじめに

今回、この国際社会実習に参加した理由は、日本語教師を目指す上で実践経験を積みたいと考えたためである。筆者は日本語教師を目指しているが、本実習に参加するまでは模擬授業などの実践的な活動を行ったことがなかった。そのため、一年次から学習してきた授業の知識を活かして実践的な活動に取り組みたいと考え、今回の国際社会実習に参加した。

本実習はインドネシアのブラビジャヤ大学の学生を対象に、オンライン上のツールである zoom を利用して実施した。実習内容は聴解会話の授業と文化紹介であり、それぞれ二回ずつ実施した。また、実習前にインドネシアやブラビジャヤ大学に対する調査・発表と実際の授業の見学を実施した。聴解会話の授業の対象学習者は日本語初中級レベルの二年生であり、文化紹介の対象学習者は日本語中級レベルの三年生である。聴解会話の授業と文化紹介はともに授業の前半 45 分間で実施した。授業の後半 45 分間はクラス担当教員による授業を見学した。

活動内容

1. 授業見学について

実習を行う前に授業見学を実施し、筆者は B クラスの授業を見学した。この授業見学を通して、授業の進め方やクラスの雰囲気事前に把握することができた。見学日の授業では、前半 45 分間でグループごとの簡単な日本語会話劇が実施されており、生徒たちの創作した劇を鑑賞することができた。この劇や劇に関する質疑応答の様子から、学習者の日本語レベルや授業態度を捉えることができたと考える。授業の後半 45 分では、教科書に沿った文法指導の授業が展開されていた。この文法指導の授業を通して、教師の指示に従って問題を解いたり、周囲の友人と協力して授業に取り組んだりする生徒の様子を観察することができた。

授業見学を通して、授業の進め方やクラスの雰囲気だけでなく、生徒の日本語レベルや授業態度、授業風景などについても知る事ができた。翌週に控えた聴解会話の授業に対する準備のヒントを得ることのできた有意義な活動であったと振り返る。

2. 聴解会話の授業

聴解会話の授業は教科書の練習問題を中心に進めた。まず、教科書のモデルダイアログを流し、学習者に本時の学習文法の説明やモデルダイアログの意味説明を行った。ここでは学習者が理解できているかを確認するため、繰り返し説明したり、語彙コントロールに力を入れたりした。次に、教科書の問題を解き、学習文法の理解を促した。ここでは教師の発言が多くなりすぎないように気を付けて問題を進めた。最後に、筆者が作成したオリジナルのグループワーク課題を学習者に取り組んでもらい、本時の学習文法の定着をはかった。グループで学習文法を使用した言語活動を行い、その後にクラス全体で何人かのグループに発表してもらった。聞いたり、書いたりするだけでなく、話してみることで学習文法が使えるようになることを目指した。

聴解会話の授業を通して、授業をより良くするための工夫を考えることができた。初めて挑む授

業であったが、学習者の様子に気を配りながら適切なスピードで進めることができたと振り返る。しかし、スライドの表記が分かりづらい箇所が見受けられたり、学習者との交流が少なかったりした部分があるなど、反省点も多くあったと考える。

3. 文化紹介

文化紹介では、日本の観光地について紹介した。文化紹介は二度実施する予定だったが、機械トラブルのため、一度しか実施することができなかった。筆者は観光地を県ごとに紹介した。紹介した県は大阪、奈良、京都、愛知、岐阜の五か所である。各県の観光スポットや名産について学習者にスライドを使用しながら紹介した。紹介では、説明が多くなりすぎてしまわないよう、クイズやアニメの紹介など学習者の興味をひくような内容を取り入れた。また、学習者が退屈してしまわないよう、あまり知られていない観光地も紹介するように工夫した。

文化紹介の授業では、聴解会話の授業での反省を活かした授業ができた。スライドの表記に注意を払い、学習者にクイズを楽しんでもらうことができたと振り返る。一方、機械トラブルがあった点は反省すべきだと考える。事前に機械トラブルに対処できるよう、コンピューターの準備をしておきたい。

実習を通して学んだこと

実習を通して学んだことは、学習者とのインタクションの大切さである。聴解会話の授業担当の先生から、「学生とのインタクションが少なかった」というコメントを頂いた。自身の授業を振り返ると、教師の説明が授業の大半を占めてしまっており、生徒と交流する機会を設けることができていなかったと反省する。学習者に質問したり、学習者の回答にコメントしたりするなど、積極的なインタクションを取ることが大切だと考える。これからの授業では、学習者と積極的に交流し、一方的な授業にならないようにしたいと考える。

また、今回の実習を通して、授業資料の大切について学んだ。聴解会話の授業と文化紹介の両方でスライドを作成したが、授業をしている中で、聴解会話の授業スライドが短すぎてわかりづらいように感じた。また、一部の漢字にルビが振られておらず、学習者にやさしくない表記になってしまっていた。この反省を活かして、文化紹介のスライドでは、スライドの量を増やし、学習者が見やすい表記になるよう工夫を凝らした。その結果、学習者が理解できない部分を減らすことができ、わかりやすかったというコメントを頂くことができた。これからもスライドの表記に気を付け、授業に支障が出ないよう様々な工夫をするようにしていきたい。

さいごに

今回の実習に参加し、初めての授業と文化紹介に取り組む中で、様々な発見や課題を得ることができた。また授業の進め方やスライドの作り方など、授業の基本も学ぶことができた。来年度からは教育実習や模擬授業など、実践的な活動が増えると予想される。今回の実習で学んだことを基に、これからも授業をより良くするために考え、学んでいきたいと考える。

<聴解会話の授業スライド>

「コースをまちがえた場合は、
どうしたらいいですか」

「途中でやめたい場合は？」

練習C

1)

- ①出発の時間に間に合わない
- ②知らせて

2)

- ①急に都合が悪くなった
- ②連絡して



<文化紹介スライド>

道頓堀(どうとんぼり)



- ・^{ふね}船に乗れます
- ・^{かんぱん}グリコの看板が有名です

大阪 Osaka

Q. 大阪の有名な食べ物は何ですか？

- ①天ぷら
- ②たこ焼き
- ③そば



Report on the 2025/26 Guided International Field Study Program

国際社会実習（海外調査実習Ⅱ）

English as an Additional Language (EAL) in Canadian Public Schools

*Dana Lingley
International Studies Course*

Introduction

A guided international field study program was introduced during the 2025/26 academic year for students in Years 2 to 4. The program was conducted as a teacher-guided, credit-bearing International Field Study Course, that focused on observing English as an Additional Language (EAL) educational support programs for newcomers within the Anglophone South School District (ASD-S) in southern New Brunswick, Canada. This field study was conducted with the cooperation of the EAL Subject Coordinator for the ASD-S. The program was designed to provide participants with an opportunity to observe educational practices in an international context while also developing intercultural communication skills and professional awareness related to language education. Unlike standard short-term study abroad programs that focus primarily on language learning, this field study had an emphasis on guided classroom observation, reflective practice, and engagement with Canadian educational environments.

The focus of the field study was on EAL classroom observations, interviews with local teachers and ASD-S officials, participation in a professional development workshop, and delivering presentations about Japan and its culture to students enrolled in ASD-S schools. Through these activities, the participant was able to engage directly with teachers, students, and educational support staff while gaining insight into how an EAL program has been implemented within the ASD-S school system. The program was also designed to encourage critical reflection on language education, student support systems, and communicative teaching practices within a context that differs considerably from Japanese public school English education.

International Field Study: Selection Process, Preparation, and Evaluation

The Guided International Field Study to Saint John, New Brunswick was open to students from Years 2 to 4. For this guided study trip, a student selection process was coordinated through the Study Abroad Committee. Interested students were asked to submit a detailed proposal outlining their motivation for participating, their interest in English language education and Second Language Acquisition (SLA), and how they hoped to benefit from the experience.

It was decided that the field study would have a limited enrollment and that one or two students would be selected based on the clarity and strength of their proposal, and their demonstrated interest in SLA and language education. Proficiency in English communication was also considered, as participating students were expected to engage and interact with EAL

teachers, students, and school staff. Special consideration was given to students who wanted to connect this field study with their seminar research. One student was chosen based on the strength of their proposal.

Following the selection, the participant engaged in a series of teacher-guided pre-departure workshops focused on research preparation, intercultural adjustment, and professional expectations related to the field study. The workshops included individualized guidance on research topics, support with developing interview questions regarding classroom observations and professional conduct during school visits.

As the participant had never previously traveled or studied abroad, considerable attention was given to helping him develop realistic expectations regarding daily life in Canada and the challenges that can arise during intercultural communication and adjustment to a new culture. The intention of these workshops was twofold: to support his transition into a new environment and maximize the educational value of the experience through preparation and reflective practice. As such, I emphasized the importance of approaching this field study as a unique opportunity to conduct field work, critical reflection, and intercultural learning.

Overall, the Field Study of Second Language Learning in Canada was a unique opportunity, and Mr. Ishikawa navigated his new environment in a professional manner and had minimal problems adjusting to the new lifestyle in Canada. Throughout the program, he demonstrated a serious and reflective attitude toward both the educational and intercultural aspects of the experience.

Homestay and Cultural Immersion

An important component of the field study program was the homestay experience within a Canadian family environment. Along with providing Mr. Ishikawa with support while he adjusted to a new life, the homestay provided ongoing opportunities for authentic English communication and exchange outside of the daily formal educational settings. Through shared meals, family activities, local excursions, and conversation, Mr. Ishikawa was able to experience aspects of Canadian culture and lifestyle firsthand while developing greater confidence using English in natural communicative contexts.

The homestay component also encouraged ongoing reflection and discussion regarding cultural differences, communication styles, education, and everyday life in Canada. The interactions during the homestay added an extra element to the formal school observations and contributed to a more immersive and meaningful international learning experience. Because the participant stayed directly with the supervising instructor's family, there was also considerable time spent discussing and reflecting on the daily school visits and observations.

English as an Additional Language (EAL) Public School Visits

The EAL program within the Anglophone South School District has grown substantially over the past ten years as the number of new immigrants (newcomers) to southern New Brunswick has increased dramatically. With this influx of school-aged children the ASD-S has had to adapt

quickly over the years to accommodate these students with English support. In this endeavor, the ASD-S has had to continually develop a curriculum, increase the number of EAL teachers, provide training and support for classroom teachers, and provide oversight to the schools within their jurisdiction.

As this field study required extensive coordination with Matthew Kernighan, the field study began prior to departure. During the months leading up to our departure, online meetings and orientation sessions were conducted to provide a clearer understanding to the structure of the ASD-S EAL program. These meetings provided valuable insight into what we could expect throughout the program.

During each school visit, Mr. Ishikawa was accompanied by experienced EAL Tutors who provided contextual explanations of educational approaches, student support systems, and the overall structure of the ASD-S EAL program. These EAL Tutors are responsible for visiting schools to conduct assessments and provide support for EAL classroom teachers, so they are keenly aware of each school and its EAL situation. As each school has its own unique program based on the number of newcomer students, their ages, and their English support needs, having the EAL Tutor's guidance was important in helping him to understand classroom practices and therefore engage more deeply during the observations. This led to more meaningful engagement during the observations as Mr. Ishikawa was able to gain a deeper understanding of what he was actually observing each day. The EAL Tutors also played an important role in facilitating communication with teachers and students. This helped Mr. Ishikawa to better understand how specific classroom activities and approaches were connected to the broader goals of language development and cultural integration. The presence of the EAL Tutor also allowed the classroom teacher to focus on the lesson which allowed Mr. Ishikawa to observe how typical EAL classes are conducted in each school.

In addition to observing EAL support classes and more intimate one-to-one tutoring sessions, Mr. Ishikawa was also able to observe how EAL teachers collaborated with classroom teachers during other subject classes. These observations highlighted the important role EAL educators play in supporting newcomer students' participation and language development across various educational contexts.

Summary Comments and Challenges

As this was the first time to conduct this field study, one of the main challenges was the initial coordination with the Anglophone South School District office. Since this field study involved visits to multiple public schools, classroom observations, and direct interaction with students and staff, there was a need for extensive coordination and administrative approval prior to starting the field study. Fortunately, Mr. Kernighan, the EAL Subject Coordinator was receptive to our initial inquiry about cooperating with this field study. This support was an essential component in establishing the field study program and creating opportunities to observe a wide range of EAL classes within the public school system. The successful coordination required ongoing communication with the ASD-S in order to arrange school visits, classroom access, scheduling, and EAL Tutor chaperones throughout the field study.

During the program, one of the unexpected challenges was that, as Mr. Ishikawa was adapting to each new school visit, so too were those involved with the EAL Program. Initially, we were informed that there might be an opportunity to take part in a culture-themed class or club, but after starting the school visits we were asked to prepare a presentation for middle school-aged students. While this wasn't completely unexpected, the details were not exactly as we anticipated, so Mr. Ishikawa had to rethink his initial plan for a longer class presentation. This experience demonstrated the importance of remaining flexible and open to new directions during school visits. Since this was the first time for the ASD-S to host this type of field study, initial participation opportunities were somewhat limited to observation and interviews with teachers. However, as familiarity with Mr. Ishikawa and the program increased, we received additional invitations for him to conduct presentations about Japan and Japanese culture.

In terms of the observations and drawing comparisons to Japanese education, this program presented some limitations for direct comparison with Japanese public school English education. The EAL program in the ASD-S focuses on providing stand-alone EAL support classes, personalized tutoring outside the regular curriculum, and in-class support during other school subjects, where EAL teachers work alongside classroom teachers to assist EAL students who need additional support. Since Japan does not have such a large population of newcomers enrolled in local public schools, this type of language support is not common. In spite of this limitation for direct comparison, Mr. Ishikawa was able to notice and learn more about how EAL teachers support newcomers' English development and what approaches and activities they have found to be effective. Mr. Ishikawa focused on these two areas in his reflection and considered how specific approaches and activities could be effectively used during English classes in Japan.

Along with the varying types of EAL support, there was a considerable variation in the approaches employed at each school observation. This is partly due to varying teaching philosophies among the teachers, as well as the type of support needed in each context. At Saint John High School, for example, in a stand-alone EAL class, the teacher used a communicative approach that was much more student-centered, possibly to account for the age and cognitive maturity of the students present in the class. This was in contrast to Hazen White St. Francis Elementary School, which used a more structured approach to teaching vocabulary and reading skills.

In spite of the variance among the schools and the teaching approaches, Mr. Ishikawa was able to identify a common theme: teachers tended to allow students to experiment with language use as they learned. In particular, he focused on how each school employed games and competition in their lessons. This was reinforced when Mr. Ishikawa attended an ASD-S teacher development workshop on Gamification at the District Office. During the workshop, Mr. Ishikawa was able to learn more about the theory behind using games in the language classroom, discuss the merits of gamification with teachers, and participate in a collaborative task to create an original game. This provided valuable reinforcement to support his observations. The workshop was also a great opportunity for Mr. Ishikawa to interact directly

with practicing educators in a professional development setting and discuss gamification in language teaching within Canadian public schools.

The one challenge that remained present throughout the field study was that Mr. Ishikawa was the sole participant, and therefore could not benefit from peer learning through discussion and collaboration with other students during the program. At the same time, the smaller scale of the program allowed for more individualized guidance, ongoing discussion, and flexibility in adapting the field study experience to Mr. Ishikawa's interests and observations.

Despite these challenges and contextual differences, the program provided valuable opportunities for reflection, intercultural communication, observation, and engagement with diverse EAL teaching approaches and practices. The field study also demonstrated the potential value of future collaboration between the International Studies Course and the Anglophone South School District in supporting experiential and internationally focused learning opportunities for students interested in language education and intercultural communication.

Expressions of Gratitude

I would like to express my sincere gratitude to Matthew Kernighan for all that he did to help coordinate the EAL field study program. Matthew is the Subject Coordinator for the Anglophone South School District EAL Program, and was responsible for obtaining permissions, coordinating with each school, scheduling, and providing continuous guidance on the EAL program. Typically, visits to public schools require local criminal background checks for anyone outside of the school system. Since Mr. Ishikawa was visiting from Japan and was unable to obtain this documentation, Matthew consulted with District Office officials and arranged for chaperones to accompany us during the school visits. Additionally, Matthew was responsible for coordinating with each participating school to arrange the visits and explain their purpose. Opening one's classroom to outside observers can place additional demands on teachers, and I would therefore like to recognize the many teachers who warmly welcomed us into their classrooms.

We would like to give special thanks to Connie Culligan and Raya Khederi, both of whom work as EAL Tutors supporting teachers throughout the ASD-S school system. Despite their extremely busy schedules, both Connie and Raya generously agreed to accompany Yamato on his school visits and provided invaluable support throughout the program. Finally, we extend our gratitude to all the schools, including the staff and students who exhibited genuine kindness, hospitality, and interest in this field study program.

Mr. Ishikawa was a great representative of Kochi University and the International Studies Course as he undertook this field study with a sense of seriousness and a positive attitude. (see Appendix 4) Throughout the program, he was able to stay focused, remain well-prepared, and adapt his approach after reflecting on what he learned at the end of each day. As a result, he was able to go into new schools on each visit, meet and communicate with new people, and interact with students from kindergarten all the way through high school. Doing all these things while using a second language is a challenge in and of itself, but to also maintain a focus on

observing EAL educational approaches and activities is on another level. I was impressed with his commitment to the field study and noted how he would spend time reflecting and writing notes when he came home each day. His positive attitude was also noticed by others involved in the school visits. Connie Culligan commented, *“Spending time with Yamato has been my absolute pleasure! He is a wonderful young man.”* This feedback was echoed by Raya Khederi, who remarked, *“It was lovely spending time with Yamato this morning. What a sweet, polite boy!”*

Overall, this field study provided a valuable opportunity for classroom observation, experiential learning and intercultural communication within a Canadian educational context. Through collaboration with the Anglophone South School District, the program allowed Mr. Ishikawa to engage directly with EAL teachers, newcomer students, and local community members while reflecting critically on language education and teaching practices. It is my sincere hope that this field study program will continue to develop in the future and provide similar international learning opportunities for future International Studies Course students.

Appendix 1 – Field Study Brochure (Language Education Field Study in Canada)

国際社会実習(海外調査実習)II

Language Education Field Study in Canada



- March 9-23, 2026
- New Brunswick, Canada
- Language education in context
- Independent/guided field study
- Field research/data collection
- School visits/observations
- 1-2 students will be selected

Are you interested in doing guided field research on language education outside Japan?
Would you like to learn more about primary school French language education or
English as an Additional Language (EAL) in an international context (Canada)?

Application Procedure

Prepare a detailed research proposal and submit it to the Study Abroad Committee. The application/proposal should include the following:

- Research background
(Show that you have read about your area of research interest, especially as it relates to the language education situation in N.B.)
- Detailed research plan/design (in consultation with your seminar teacher)
- How you will collect your data
- Expected outcomes (e.g., undergraduate thesis data, how this research will benefit your report/presentation)

The successful candidate(s) for this course:

- will have demonstrated English ability, especially in communicative English
- will be a highly motivated, research-oriented student (2nd year or above) with a strong interest in language education (e.g., taking teacher license courses)
- will further develop their research plan with a supervising teacher during the 2nd semester in preparation for the field study
- will conduct guided research in N.B. schools with Dana Lingley in March 2026

Application Deadline: November 7th, 2025

Successful applicant(s) will be notified by November 17th

Submit application to: Prof. Darren Lingley (lingley@kochi-u.ac.jp)

For detailed information: Dana Lingley (danalingley@kochi-u.ac.jp)

説明会(2) 10月17日・24日(金) 12:10-13:00 Rm 310

Appendix 2 – Itinerary

Week 1 Itinerary (March 9 – 13): Guided International Field Study Program

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
8:00 / 12:30	Travel	Arrival Saint John, N.B. (11:00 am)	Research and preparation for School Observations	Research and preparation for School Observations	Research and preparation for School Observations
13:00 / 16:30	Arrival – Vancouver Sightseeing	Homestay Orientation	Sightseeing Saint John City Market and the Uptown Area	Sightseeing: Saint John Reversing Falls and Irving Nature Park	Shopping Excursion
17:00 / 20:00	Travel to New Brunswick	Welcome Dinner	Ice Skating at the Charles Gorman Arena	Family Dinner	Saint John Sea Dogs hockey game at TD Station

Week 2 Itinerary (March 16 - 20): Guided International Field Study Program

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
8:00 / 12:30	Hazen White St. Francis Elementary School (K-5)	Princess Elizabeth School Elementary / Middle School (K-8)	Millidgeville North School Elementary / Middle School (3-8)	Professional Development Day on Gamification at ASD-S Office	Millidgeville North School Elementary / Middle School (3-8)
13:00 / 16:30	Post Observation Reflection and Preparation	Post Observation Reflection and Preparation	Curling Experience at Thistle St. Andrew's Curling Club	Professional Development Day on Gamification at ASD-S Office	Saint John High School (SJHS) (8-12)
17:00 / 20:00	Ice Skating – Charles Gorman Arena		Post Observation Reflection and Preparation	Preparation for Presentation	Post program reflection

Appendix 3 – New Brunswick Field Study Costs

2025/26 International Guided Field Study Costs

Tour costs

	\$CDN	Japanese yen
Airfare		275,000
Homestay		0
Transportation		0
Spending money		40,000
Travel insurance		12,000
Canada visa		900
Total		327,900

Appendix 4 – Email from EAL teacher to the Subject Coordinator

Hi Matthew,

I wanted to let you know Yamato's visits on Wednesday and this morning were simply amazing! Every teacher had positive feedback and thought Yamato did really well. His presentation was informative, he was so friendly and open with the kids, and everyone loved him.

This visit was a huge success and I hope we can have more of these in the future. There is nothing like learning first-hand about the different cultures.

I am also grateful that Connie was here because it allowed me to continue teaching while she helped Yamato.

Thanks again for this opportunity!

Mrs. Coughlan
EST-EAL Teacher
Millidgeville North School

A Study of EAL Practices in Saint John, New Brunswick, Canada

人文社会科学部 国際社会コース3回生

Yamato Ishikawa (石川大和)

Introduction

The purpose of this report is to introduce my study trip to Saint John, New Brunswick, Canada, and to reflect on what I learned through observing English as an Additional Language (EAL) classes in some schools within the Anglophone South School District. During this program, I visited four schools, including kindergarten, elementary, middle, and high schools, and observed how teachers in Canada teach English to students with diverse linguistic backgrounds. In addition, I participated in a professional development session on gamification in language teaching with local EAL teachers and coordinators. This report will focus on the characteristics of EAL practices, and the insights gained from observing each classroom.

Context

Saint John is a city located in New Brunswick, Canada. According to the Government of Canada (2021), the population of Saint John was approximately 69,895. Compared to larger urban areas such as Toronto or Vancouver, Saint John is a relatively small city. However, the City of Saint John (2025) posted that Saint John's population, as of July 1, 2024, reached 78,165, the highest level since the early 1980s. The city has also been welcoming over 2,000 permanent residents from other countries annually in recent years. This trend indicates that the number of newcomer students who require English as an additional language support is increasing. As such the Anglophone South School District has had to implement new EAL support programs to accommodate these newcomers.



Program Overview

The program consisted of school visits over five days (see Figure 1 for school names

and grade levels). During the school visits, I observed EAL classrooms designed to support newcomers to Canada in developing their English skills while participating in regular classes. I observed each EAL class and, at times, experienced the lessons from a student's perspective. This allowed me to understand how EAL teachers effectively teach English to their students and also experience the classes for the learner perspective providing me with a balanced observation.

School Name	Grade Level	Ages
Hazen White St. Francis Elementary School	Kindergarten - Grade 5	5-11
Princess Elizabeth School	Kindergarten - Grade 8	5-14
Millidgeville North School	Grade 3-8	8-14
Saint John High School	Grade 9-12	14-18

In addition to classroom observations, I also participated in a professional development session. EAL Teachers working in schools within the Anglophone South School District gathered to share their experiences and discuss new teaching methods. When I attended the session, the main topic was gamification in language teaching. Therefore, the teachers discussed how games, such as board games and chess, can be used as tools for teaching English. They emphasized that these activities are not only enjoyable but also effective in reinforcing language skills and encouraging communication among learners.

EAL Practices Across Schools

Hazen White St. Francis Elementary School (HWSF)

Hazen White St. Francis Elementary school (Kindergarten - Grade 5) has 120 students in total, 75 of whom are newcomers to Canada. This means that more than half of the students require additional language support, so the school provides a well-developed EAL program.

At HWSF, three teachers are responsible for supporting kindergarten and elementary students who need additional language support. Before regular classes begin, some students visit a dedicated EAL classroom to work on specific tasks. Kindergarten students tend to learn basic vocabulary using alphabet cards or picture books. In contrast, elementary students focus on reading comprehension to acquire grammar and sentence structure. Some EAL teachers also visit regular classrooms to support

students during lessons such as math or social studies. When I visited the school, one EAL teacher participated in a regular math class and helped students doing multiplication with additional language support and encouragement. This support usually consists of ensuring the students understand instructions given by the math teacher.

Through the EAL program, each student reflects on their learning using a portfolio developed by the New Brunswick Department of Education. It is called “My Language Learning Journey” and provides specific goals, such as “I can understand simple, basic greetings” based on the CEFR levels. At HWSF, teachers try to provide reflection opportunities within each class, which helps students understand what they can do in English and track their progress over time.

Princess Elizabeth School (PES)

Princess Elizabeth School has a total of 605 students. Due to its large student population, the school has a significant number of newcomer students from a wide range of countries, including Kenya, Poland, and Ukraine. In the EAL classroom, four teachers work together to support students at scheduled times. Each teacher is responsible



for different levels. For example, one teacher supports students in grades 1 to 2, while another focuses on students in grades 4 to 5.



In the EAL class, teachers incorporated games such as UNO and GUESS WHO into their English instruction. Therefore, each student used vocabulary and simple grammar while playing games with their peers. This approach appeared to increase students' engagement and Willingness to Communicate (WTC) toward language learning. In contrast, middle school students also engage in reading comprehension tasks using stories. When I participated in a class, students explored the delightful story of "Honeydew and Honeybees"

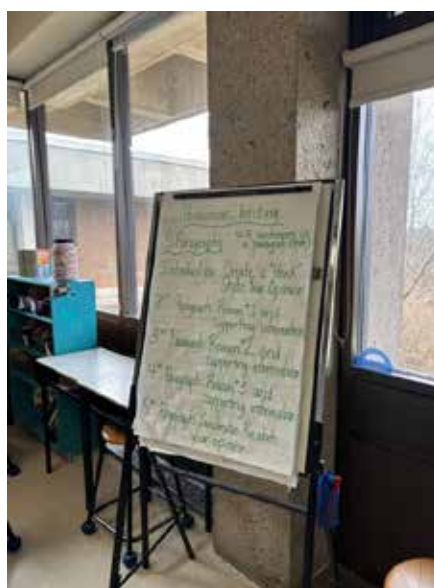
(from <https://www.superteacherworksheets.com/index.html>). This resource helped them engage with the text through reading comprehension questions and a creative writing prompt.

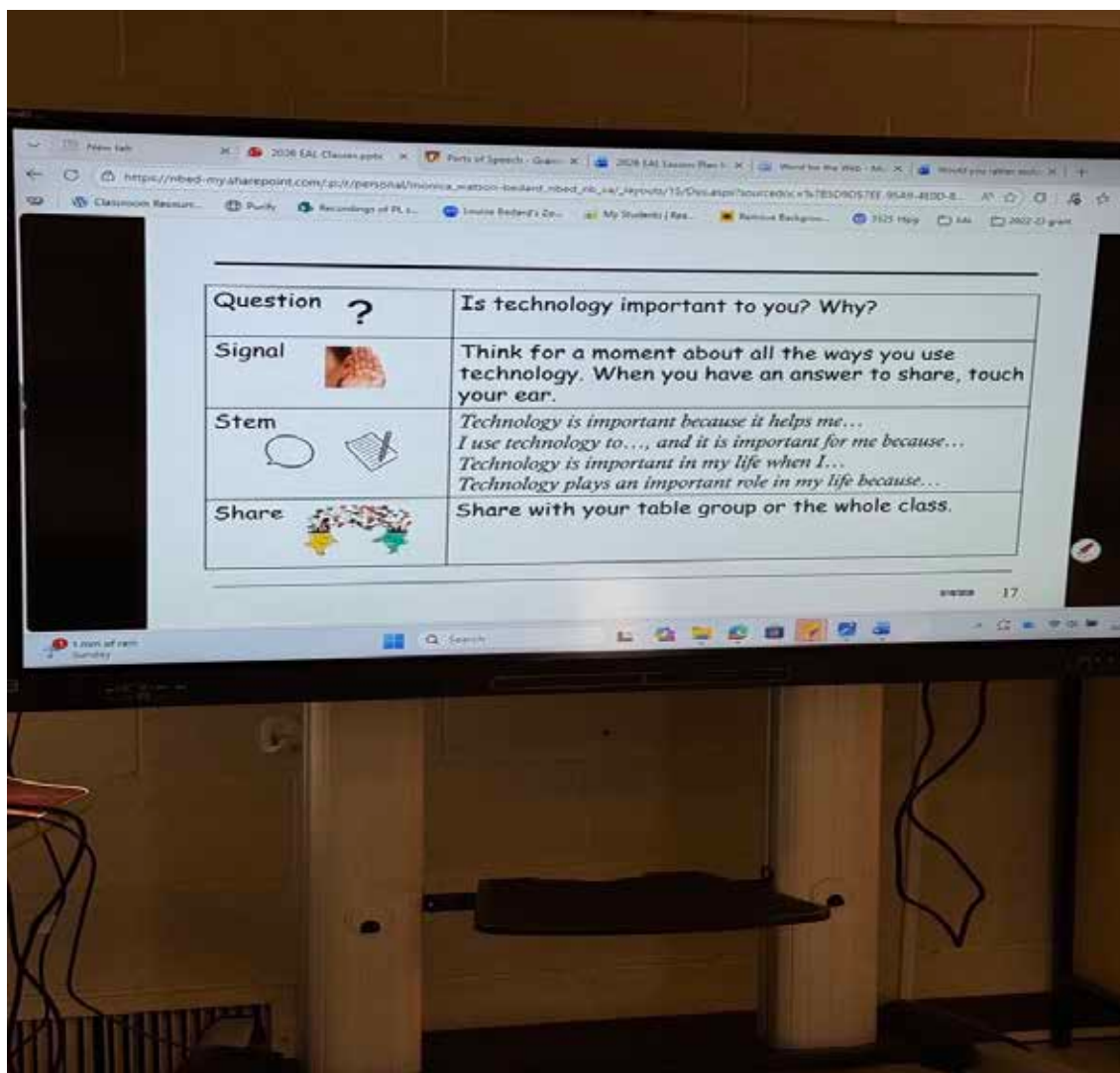
During the whole of the EAL program, teachers collect and organize students' worksheets to monitor their progress and identify the language difficulties each learner faces. In one case I observed, an elementary school student was able to answer questions focusing on the meaning and form of vocabulary in the text without difficulty. However, it became clear from the worksheet that the student struggled to respond to questions that required him to express his own ideas or personal experiences. Therefore, the teacher provided more opportunities for students to share their own experiences during the lesson. Additionally, when students had difficulty expressing their thoughts, the teacher supported them by asking yes/no questions, which made their ideas more concrete and easier to express in English.



Millidgeville North School (MNS)

Millidgeville North School has a total population of 661, which is larger than that of HWFS and PES. Therefore, there are six teachers in the EAL program. The number of students in each class varies by grade level and language proficiency. For instance, one teacher was working one-on-one with a kindergarten student, helping them learn how to pronounce each letter and number. When I participated in a class, the teacher incorporated BINGO into the class and checked students' understanding by asking which letters or numbers appeared on each ball. In contrast, other teachers were working with small groups of four to eight students, encouraging them to express their thoughts in English. For example, students responded to a question, such as "Would you rather live with someone important to you, or live with your smartphone?" During these classes, teachers guided students through the writing process using a blackboard, which promotes the transition from brainstorming to editing.





Throughout the EAL program, teachers carefully select teaching methods and materials based not only on students' proficiency levels but also on their emotional needs. One teacher mentioned that they prepare a variety of learning materials in case students lack motivation. In fact, I saw some students struggling to continually engage with reading comprehension through a worksheet. However, teachers could encourage students to challenge themselves and develop confidence using English.

Saint John High School (SJHS)

Saint John High School has a total student population of approximately 1070, the largest among the four schools I visited. In high school EAL, classes are gradually student-centered, reflecting students' cognitive development. The classroom layout is designed to promote interaction, with desks arranged in groups of four.

In the lesson I observed, eight students participated, from a variety of countries including China, Spain, and France. Students were asked questions such as “Would you rather be good at singing or dancing?” and moved to different areas of the classroom based on their choices. After that, the



EAL teacher asked individual students to explain the reasons for their choices. At the end of these whole-class activities, students worked in small groups of four and participated in educational board games. For example, one group played a guessing game called “HEDBANZ”, in which students asked and answered questions repeatedly in English. Through this activity, they actively used the language within a limited time.

Based on these classes, teachers continuously assessed students’ proficiency using the CEFR framework and designed their lessons accordingly. Especially, they use online platforms such as “Ellii” and “ReadTheory” for A2-level students, and “Lalilo” for A1-level learners. Furthermore, AI is also used in instruction. Teachers generated images related to target grammar points using “ChatGPT”, allowing students to learn language through both visual and textual input. Additionally, students are able to feel that English is more relevant to their lives when they work with materials about their local culture generated by AI. It is thought that technology can be effectively integrated into language teaching to support diverse learners.



Professional development session on Gamification

In addition to those EAL observations, I participated in a professional development day on gamification. This session was a scheduled workday during which EAL teachers explored how games can be effectively applied to language teaching. Therefore, they were required to share their experiences and discuss practical strategies for incorporating game-based activities into their classrooms.

One of the key themes of the session was the role of gamification in increasing student motivation and reinforcing language learning. As observed in the three schools I visited, games such as card games, BINGO, and board games are frequently used to support newcomer students. These activities not only make lessons more enjoyable but also provide opportunities for repeated language use in meaningful contexts.

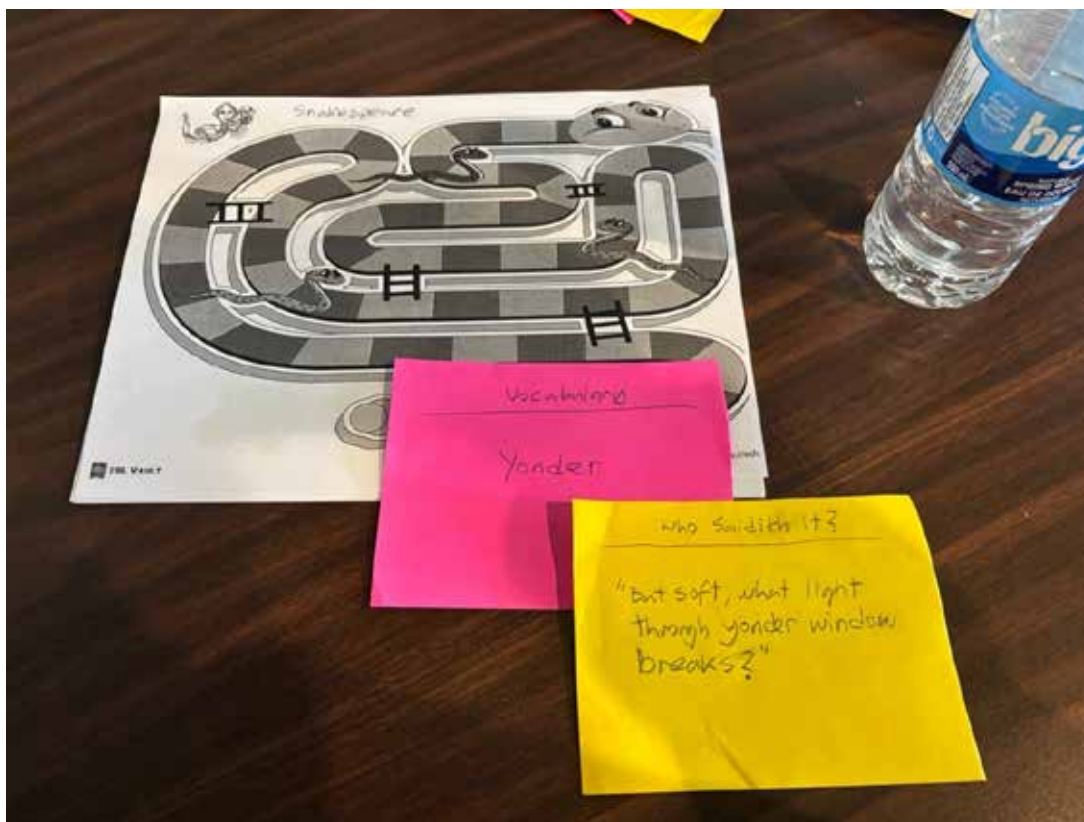


However, the session first addressed several challenges associated with gamification. For example, strict curriculum requirements and exam-oriented systems can limit the time available for such activities. In addition, some teachers pointed out that students may become overly excited or difficult to manage during gameplay. Therefore, it is essential for teachers to carefully design activities and maintain a balance between enjoyment and learning. Games should also be appropriate for the classroom context, as well as students' age and proficiency levels. Furthermore, teachers emphasized the importance of incorporating wrap-around activities to connect games with learning objectives.

To deepen our understanding in the session, we also engaged in hands-on activities in small groups of four or five EAL teachers and worked collaboratively to design a lesson using a board game. Our group focused on creating a lesson based on Shakespeare, which is often considered challenging even for native speakers. Therefore, we designed a board game in which reading comprehension questions were embedded in each space so that students would roll a dice and answer the corresponding questions. Additionally, some members carefully considered the visual design of the materials using AI tools to make the activity more engaging.

Through this experience, I realized that gamification is not simply about making lessons

enjoyable, but about designing meaningful learning opportunities. It requires careful



planning to balance engagement and educational value. In addition, collaboration among teachers plays an important role in developing effective teaching practices. This session also helped me better understand the use of game-based activities that I observed in EAL classrooms.

Analysis

Across the four schools, one of the most striking characteristics of EAL practices was the consistent use of game-based learning. Activities such as UNO, BINGO, and various board games were not limited to elementary levels but were also actively incorporated into middle and high school classrooms to promote engagement and encourage English communication. Rather than being used merely for entertainment, they functioned as structured opportunities for students to repeatedly use English in meaningful contexts. For example, in MNS, a student used questions such as "Is he/she wearing a hat?" while playing a guessing game to identify characteristics and interact with their peers. From this finding, it is obvious that EAL education in Saint John places a strong emphasis on creating interactive learning environments in which students can actively use language, rather than passively receive knowledge.

At the same time, there were clear differences in how these activities were designed according to students' development stages. While it is natural that teaching methods vary by age and proficiency, what was particularly notable was how teachers adjusted not only the level of language but also the type of enjoyment embedded in the activities. In elementary school, students were more engaged in game-like activities that emphasized repetition and participation. In contrast, high school students were encouraged to engage in more cognitively demanding tasks, such as expressing their thoughts and explaining their reasons through discussion-based activities. This indicates that the EAL program in Saint John is carefully designed to match students' evolving interests and ways of engagement.

Overall, these characteristics of EAL in Saint John suggest that effective language learning requires a balance between the acquisition of language forms and opportunities for meaningful communication. While students were often able to understand vocabulary and grammatical structures, in some cases, they struggled to express their own ideas without support. In such situations, teachers played an important role in scaffolding students' learning by providing structured support, such as guiding questions or interactive tasks using game-based activities. Especially, these types of support have been improving through professional development sessions, which enable EAL teachers to continuously refine strategies in order to engage diverse learners. Uniform, teacher-centered instruction was shifted to a more flexible and learner-centered educational model through the above two characteristics in the EAL setting in Saint John.

Conclusion

This study trip provided valuable opportunities to observe the EAL program in Saint John public schools and to understand how English is taught to students from diverse linguistic backgrounds. Through classroom observations and participation in a professional development session on Gamification, I learned that effective language education emphasizes not only the acquisition of language knowledge but also meaningful communication, student-centered learning, and responsiveness to learners' individual needs.

In particular, the use of game-based activities and scaffolding strategies played an important role in encouraging students to express themselves in English and to actively

develop confidence. It was also significant that teachers continuously refined their practices through professional development, which enabled them to support a wider range of students.

However, it should be noted that EAL education in Saint John cannot be directly compared with English education in Japan. Unlike Canada, Japan does not receive a large number of immigrants, and it is not always feasible for one teacher to provide intensive support to small groups of students within each class. Therefore, simply adopting the above model is neither realistic nor appropriate in the current educational context in Japan. Instead, a gradual and context-sensitive approach is required.

Nevertheless, this study highlights an important implication for English education in Japan. In many classrooms, instruction tends to focus on the acquisition of language forms through drill-based activities. This means that students may become familiar with reading and listening, but they struggle to speak and write English effectively outside of classrooms. From this perspective, it is essential for teachers to create meaningful purposes and contexts for language use. Emphasizing when, why, and how English is used can help students develop their ability to communicate effectively as well as their linguistic knowledge.

As a future English teacher, I would like to incorporate these perspectives into my own teaching practice and design lessons that encourage students to actively engage with English and express their ideas with confidence.

2025 年ハルピンスタディツアー

高橋 俊

2025 年 9 月 21 日～28 日、中国のハルピン・北京においてスタディツアーを行った。

ハルピンでは、高知大学と大学間交流を締結している哈爾濱師範大学に大変お世話になった。院生たちが現地を案内してくれ、また日本語学科が様々な交流イベントを開催してくれた。鄭楊先生はじめ、現地のスタッフに篤く感謝する次第である。

また北京では、万里の長城や故宮などの観光地を回りながら街を散策することで、首都に住む人びとの営みを観察することができた。

参加した学生たちには「現地で一番気になったことについてレポートを書くように」と指示を出した。学生たちの多くは初めての中国だったため、事前指導は「現地での注意事項」とどめ、「ファーストインプレッション」を重視した。その結果、様々な観点に注目した論考が揃った。

帰国して 2025 年 11 月にいわゆる「高市発言」があり、2026 年現在、日中関係は過去に例がないほどに冷え込んでいる。2026 年度は中国（中華人民共和国）でのスタディツアーは行わない予定である。しかしこういう時期だからこそ、彼らの体験は貴重であり、その率直な感想は資料的価値も高い。若者が中国を体験した「ナマの声」をぜひご覧になってほしい。

【スケジュール】

9 月 21 日 関西国際空港集合→上海→ハルピン
9 月 22 日～23 日 ハルピン散策
9 月 24 日 ハルピン師範大学日本語文化祭参加
9 月 25 日 ハルピン→北京
9 月 26 日～27 日 北京散策
9 月 28 日 北京→上海→関西国際空港解散

【費用（学生 1 人）】

航空券：70,000 円
ホテル：4,000 円×7 泊＝28,000 円
中国国内移動：10,000 円
食費・入場料・その他：30,000 円
合計：138,000 円



日中関係—反日感情について—

高知大学人文社会科学人文社会科学科国際社会コース

西村 美紀

事前調査

ハルピNSTAディツアーに参加するにあたり、私は関東軍について調査を行った。その中で、日中の軍事的な対立が今なお改善されていないことが分かった。

1. 映画

1.1. 731 部隊

731 部隊とは、ハルピンを拠点として細菌兵器の研究、運用を行った関東軍の部隊である。満州国内において蚤を媒介してペスト、コレラなどを人為的に伝染させた。

この史実をもとにして、映画『731』が制作された。公開日は 9 月 18 日であり、これは満州事変の発端となった柳条湖事件が発生した日、中国においては国恥記念日であり対日関係を意識していると考えられる。予告編において、ガスマスクを被った人物たちが火炎放射器で野原を焼くシーンがある。実際に 731 部隊は『『満州日日新聞』によると、ペスト患者が発生した三角地帯の内、田島犬猫病院とその周辺の 20 世帯は 10 月 8 日に焼却、残りの室町四丁目のアパートなどは 10 月 10 日に焼却している』¹とされていることから、日本兵の残虐行為の一例として「焼却」を表現していると考えられる。

1.2. 南京大虐殺

南京大虐殺は、関東軍が南京に侵攻し住民を無差別に殺害した事件である。日本、中国双方に明確な証拠となる資料が残っていないため真偽は不明のままとなっている。

この史実をもとにして、映画『南京照相館』が制作された。予告編において、血や死体の表現がはっきりとしており印象に残る演出であった。反日的であり日本への敵対感情を煽りかねない、という指摘も見られる。個人的には、グロテスクな表現として過激であることから、少なくとも子供には見せるべきではないと考える。

2. 報道

中国においては暴力的表現の規制が厳しいとされているが、日本兵の残虐行為に関して規制はあまり見られないとされている。実際に反日映画での過激な表現を含め、戦時中の報道においても日本兵の残虐行為は強調されている。特に関東軍の爆撃機の空爆は悲惨さが強調されており、「斃されしものは頭顱糜爛し、肚破れ、腸露出し、血肉模糊として惨、見

¹ 川村一之『七三一部隊 1931-1940「細菌戦」への道程』不二出版株式会社、2022 年、p.32

るに忍びず」²とある。

対して日本も、報道に関して掲載を許可しない事項において「惨虐なる写真、但し志那兵の惨虐なる行為に関する記事は差支なし」³としている。日本兵の残虐行為は国民に対し隠蔽したうえで、中国兵の残虐行為に関しては掲載を許可していた形である。

このような両国の情報操作の姿勢は戦後 80 年経っても変化していないのが現状である。実際に、中国の軍用機や船舶が日本の領域に侵入したことは大々的に報道される一方で、日本の海上自衛隊の護衛艦「すずつき」が中国領海に侵入したことに関しては「自衛隊の運用に関わるとして改めて「答えを差し控える」とした」⁴とある。2025 年 8 月に改めて関係者からの発表はあったが、艦長の技術的なミスであるとされた。こうした事件が繰り返されていけば軍事的な衝突につながる可能性は十分に考えられることから、国民に対し適切に説明を行い、国民が監視する立場として機能するための努力が必要であると考ええる。

現地での気づき

事前調査を踏まえて、現地では反日的な国家の姿勢が国内にてどのように示されているのかについて注目した。

3. 楽曲

3.1 義勇軍行進曲

中華人民共和国の国家である「義勇軍行進曲」は、もとは「風雲児女」という抗日映画のための歌である。歌詞は勇ましく敵に立ち向かうことを旨としており、敵としては日本が想定されていたとされている。ただ、作詞家も作曲家も日本に留学した経験があり、周辺の人々との関係は良好であったことから、わざわざ抗日的な楽曲を制作した動機には疑問が残る。

国家設立 76 周年を示す旗も町に見られたことから、国家の設立、独立を勝ち取ったことを誇りとする風潮が感じられた。



2025/9/27 撮影 ホテルのテレビ番組にて

² 辻田真佐憲『空気の検閲—大日本帝国の表現規制』光文社、2018 年、p.142

³ 辻田前掲『空気の検閲』p.199

⁴ 「海自護衛艦「すずつき」艦長が 7 月で交代 中国領海を一時航行、事実上更迭か」『産経新聞』2024/9/24、<https://www.sankei.com/article/20240924EXCHV70AEVLPDOSKJ24QTPZWNQ/>（2025/9/9 最終閲覧）



2025/9/26 撮影 万里の長城にて 観光客が残したらしい落書きの中には、反日的な書き込みも見られた。

また、「我らの血肉で新しい長城を築こう」という歌詞から、万里の長城も国家の象徴として意識されていることが分かる。

これがあくまでも、大日本帝国への勝利への祝いの気持ちを意味しているのか、今なお抗日的な意識をもっているのかは不明である。観光客も多数訪れる場所に落書きを残すというのは、承認欲求を満たすための可能性も十分に考えられる。

ただ、この一部だけが切り取られ、日本国民に伝えられたとすると非常に不安を煽る要素になる。日本国民としては、伝えられる情報に偏りが無いか十分に考える必要があると考える。

3.2 松花江上

「松花江上」は、柳条湖事件から始まった日本の侵略に苦しみ嘆く人々を歌った楽曲であ

る。歌詞の中では「九一八」と、9月18日が強く意識されている。東北地方は特に関東軍の行動の拠点になったことから、松花江がその地の象徴として意識されていると考える。



2025/9/22 撮影 太陽公園への橋にて

個人的には、悲しい歌詞から一転して観光地として華やかになった松花江周辺を見て、安堵した。同時に、自分たちの国がこの場所の人々を大きく傷つけたことを忘れてはならないと感じた。

4. 町の様子

4.1 スターリン公園

スターリン公園には、抗日戦争80周年を祝う歴史パネルが展示されていた。



2025/9/23 撮影 スターリン公園にて

パネルの内容としては、黒竜江省地域の人々の奮戦を称える内容に感じられた。

ただ、パネルとして展示されてはいるが内容を読んでいる人はおらず、これが実際に反日感情を煽るのかは不明である。

4.2 高架橋の垂れ幕

撮影はできなかったが道路の高架橋にて抗日戦争80周年を記念する垂れ幕が飾られていた。一方で、北京ではこれらのようなものは見られなかった。より多くの人の目に留ませたいのなら北京の方が適していると考えられるのにも関わらずである。東北地方は特に抗日の歴史があるためか、あるいは各国からの観光客が多い北京で国家間の対立を示すのは忌避したのか、理由は不明である。

4.3 新幹線周辺地域

新幹線周辺地域の施設を調べてみたところ、日本の侵略の歴史を展示する九一八記念館、満州の歴史を展示する満州国皇宮があった。どちらも日本語での展示説明がなされており、日本人にも歴史を伝えようとする姿勢が感じられる。

個人的には、次に中国に訪れる機会があれば是非行きたいと思った。

5. 軍の広告

新幹線、地下鉄ともに軍の広告が見られた。公共交通を国営としているからこそこうした広告が可能であると考えられる。



2025/9/27 撮影 地下鉄通路にて

国歌の中でも軍がたびたび登場していたことから、国家を守る力として期待されていると考えられる。日本では自衛隊の存在そのものが憲法第九条に反しているとの意見もあることから、こうした大々的な広告はみられない。個人的には、日本では自衛隊の広告は少なく人材不足が深刻化し、自衛隊が開催するイベントにはマニアックなファンしか参加しないことから、大衆の目につく場所に軍の船の広告があることは意外であり、新鮮に感じられた。

6. 現地の人々の様子

現地において「日本人？」や「Japanese?」と問われる場面が見られた。はい、と正直答えていいのか不安に感じたが、実際、正直に答えても特に大きく態度を変えられることはなかった。この点については、個人的に意外であり安堵した部分である。また、日本においては現地人が外国人に対し「どこの国の人？」と直接尋ねる場面はあまりないことから、その点も意外であった。

ただ、北京市内において道中やや騒がしくしていたところ、坂下先輩に注意を受けた。通行人を怒らせてしまっている、とのことであった。自分では全く気付かなかったことから、観光客の視野の狭さを痛感した。

また、現地の大学での交流会において「偽満州国」という言葉が使われていた。日本人としては「満州国」という言葉そのものが偽物の傀儡国家というニュアンスを含んでいるが、現地の人々としてあれば「偽」と呼ぶべきであり、本当の意味での「満州国」の理想図があることが感じられた。

まとめ

全体を通して、反日感情は想定していたほど強く感じられなかった。ハルビンのホテルでは飲み物や朝食を提供していただき、地下鉄においても譲り合いなどの優しさが感じられた。言語が通じず困惑する場面もあったが、ジェスチャーや表情、翻訳アプリも使って何とかコミュニケーションを取ることができた。このことから、国家的な対立はあったとしても民間での友好関係維持は可能であり、その継続の努力が必要だということが分かった。個人的には、語学力を高めた上でもう一度訪問したい。そのためにも、日々の努力を積み重ねていこうと思う。

中国の大学生活と急変する社会 ーハルピンスタディーツアーに参加してー

高知大学人文社会科学部人文社会科学科人文科学コース

坂下 康信

はじめに

2025年9月21日から28日までの8日間、高知大学と哈尔滨師範大学の交流プログラムに参加し、中国東北部の哈尔滨と首都北京を訪問した。本レポートでは、現地での交流活動や都市観察を通じて得られた知見について、特に中国の大学生活の実態、都市のデジタル化の進展、そして日中の就職環境の違いという3つの観点から報告する。

1 中国の大学生活

1.1 巨大な大学施設

哈尔滨師範大学を訪問して最初に驚いたのは、そのキャンパスの規模である。以前、北京語言大学に留学した際も大学の広さに圧倒されたが、それは海淀区という学術特区に位置していたためだと思っていた。しかし、どうやら中国の大学は総じて巨大な規模を持つことが一般的らしい。興味深いことに、現地の学生は国立大学であることから「(私立大学に比べて)施設が古くてみすぼらしく



図1 校長先生たちなどがお仕事をする棟

見えないだろうか」と心配していたというが、実際には綺麗に整備されていて、その規模に咄然としてしまうほどであった。特に教員が主に使用する建物は、格調高く威風堂々とした外観(図1)を持ち、中国の高等教育への投資の大きさを物語っていた。

キャンパスではその広大さのあまりバスが運行されている。図書館も日本の大学とは比較にならないほど大きく、今回は中に入ることができなかったものの、いずれ蔵書数や学習スペースなどを見てみたいと心から思ったほどであった。

1.2 学生食堂

大学の食堂(図2)での昼食体験は、中国の食文化の豊かさを実感する機会となった。朝食はホテルで小米粥(お粥)を中心とした軽めの内容だったが、大学食堂では多数の店舗が入っており、選択肢の豊富さに目移りするほどである。

私が選んだ「面粉」という麵料理（図3）は、見た目の赤さから想像される辛さとは裏腹に、香りと旨味が際立つ絶妙な味わいであった。いろいろな店が並んでいて、おいしいのにそれでいてやすいというのは、寮生活でも食費が負担にならないように、そして飽きないようにということなのだろうか。しかし、日本でいえば「うまい、やすい、はやい」が学食にあるというのは、非常にうらやましい限りだ。



図 3 学食



図 2 招牌肉沫面粉

2 デジタル化

2.1 キャッシュレス社会の実相

中国のデジタル化の進展は、日常生活のあらゆる場面で実感することができた。デジタル化が進んでいて便利という話ではなく、現金がもはや「不便な」支払い手段となっていた。地下鉄の切符自動販売機では5元・10元紙幣のみを受け付けるものがあり、QRコード決済が完全に主流となっていることを物語っていた。なかには誰も現金を使わないからか、切符自動販売機に釣銭が残っておらず、現金で切符を買ったもののおつりが返ってこないハプニングもあった。中国では、支付宝（Alipay）のような決済アプリがなければ、日常生活に支障をきたすレベルにまで浸透していると感じた。

2.2 配達サービス

街中で目にするバイクの大半がデリバリーサービスの配達員であり、特に快递（宅配便）の車両の多さが目立った。一般的な宅配便に加え、各種通販企業の自社配送車両が街にあふれている光景は、中国のEC市場の巨大さを如実に示していた。かつて自転車の国として知られた中国は、今や配車サービスが主要な移動手段となり、都市交通の様相が大きく変化していることを実感した。日本でタクシーはぜいたくな移動手段だが、中国ではスマホ一つで呼べる気軽な移動手段のようだった。

2.3 交通インフラの発展と課題

高速鉄道での哈尔滨から北京への移動は、中国の広大さを改めて実感する機会となった。地図上では比較的近く見える両都市間も、高速鉄道（図4）で6時間を要した。地下鉄網は日本と同様に便利で、案内表示もわかりやすく整備されていたが、古い駅ではバリアフリー

化には課題が残されていることも確認できた。国営だからか、市内近辺を回るぐらいでは鉄道の料金は片道 6 元（120 円）程度で済み、気軽に使える交通網だなと感じた。それでいて急速な発展からか、車両や駅施設が新しいことが多く、ホームドアが整備されている、車両の騒音が抑えられているなど目を見張るものがあった。



図 4 中国の新幹線

3 中国の就職環境

3.1 厳しい就職事情

この夏、私自身が 2 週間のインターンシップに参加したこともあり、哈尔滨师范大学の学生たちと就職について熱心に語り合う機会を得た。彼らは日本語翻訳を専攻しているが、専門性だけでは就職が困難な現実と直面していた。多くの学生が日本への留学や日本での就職機会を模索している背景には、中国国内の厳しい就職環境があるようだ。

学生に教えてもらったことだが、専門学校の教員職でさえ博士号が必要とされるらしく、状況は日本とは大きく異なる。さらに、大学のランクによって応募資格が制限される「985・211」といった明確な序列化や、年齢制限の存在など、中国の就職市場の競争の激しさを物語る要素が数多く存在していた。日本では「学歴社会」は頻繁に議論される話題だし、多くの人々が問題視していると思われるが、どうやら中国ではもっと複雑な「学歴社会」の問題があるようだ。

3.2 新卒でも即戦力重視？！

エンジニア志望の私は、中国最大手 IT 企業の一つである腾讯（Tencent）の新卒採用要件を確認してみたが、その要求水準の高さに驚かされた。いかがその応募要項である。

岗位要求

必须具备的：

- 1、扎实的编程能力；
- 2、熟练掌握 C/C++/Java/Go 等其中一门开发语言；TCP/UDP 网络协议及相关编程、进程间通讯编程；专业软件知识，包括算法、操作系统、软件工程、设计模式、数据结构、数据库系统、网络安全等。

有一定了解的：

- 1、Python、Shell、Perl 等脚本语言；
- 2、MySQL 及 SQL 语言、编程；
- 3、NoSQL，Key-value 存储原理。

私の感想で申し訳ないが、新卒採用でありながら、まるで中途採用のような即戦力を求める内容だと感じた。日本のようにポテンシャル採用と OJT で人材を育成する文化とは大きく異なり、入社時点での高い専門性が要求されるということだろう。中国では、たとえ文系であっても多くが大学院へ進学するそうだ。これは学生の期間に多くの専門性を身に着ける必要に駆られて、という側面もあるのかもしれない。

3.3 つの不安

このような高い競争圧力の中で、中国の学生たちは謙虚で自信を持てずにいる印象を受けた。しかし、実際には学部卒業時点で日本語能力試験 N1 を取得しているなど、もっと自信を持っていいはずだ。最終日に見学した成果発表会では、翻訳だけでなく動画制作、同時通訳、演劇など、マルチメディアに渡る活動を展開しており、その多才さに感銘を受けた。学生さんによれば、多くの学生が「鉄飯碗」と呼ばれる安定した公務員職を目指す一方で、大手 IT 企業でのエンジニア職も人気があるという。後者は中年での解雇リスクがあるものの、若い時期の高収入が魅力となっているそうだ。このような「巻（過度な競争）」を避けつつも、将来の安定を求める学生たちの姿は、現代中国社会の縮図といえるだろう。

4 おわりに

今回のスタディツアーを通じて、急速に変化する中国社会の実像を目の当たりにすることができた。巨大な大学キャンパスは単なる規模の違いではなく、中国社会のさまざまな側面を映し出しているようだ。都市のデジタル化は想像以上に進展しており、日本が学ぶべき点も多い。一方で、高考から始まる激しい競争社会は、若者たちに継続的な重圧をかけており、両国の学生が互いの状況を理解し合うことの重要性を感じた。特に就活における圧力は、私がまさにキャリアについて考える時期にいることも重なり、勤勉な中国の学生を見習い今後も勉学に励もうと決心した。

哈尔滨での濃密な交流体験に加え、高知大学の仲間たちと過ごした北京での時間も非常に充実していた。万里の長城や故宮といった歴史的建造物を訪れながら、同じ経験を共有できたことは、スタディツアーならではのであった。学術的な交流だけでなく、純粋に異文化を楽しむ機会を得られたことは、大学生活における忘れがたい思い出となった。

言語や文化の違いを超えて、同世代の学生たちと将来への不安や希望を共有できたこと、そして何より、中国という国の活力と変化を肌で感じられたことは、今後の自身の視野を大きく広げる貴重な経験となると信じている。

謝辞

本スタディツアーの実施にあたり、企画・引率にご尽力いただいた高知大学人文社会科学部の高橋俊先生に深く感謝申し上げます。また、温かく迎え入れてくださった哈尔滨師範大

学の先生方、現地での活動を支えてくださった学生の皆様に心より御礼申し上げます。

本プログラムを支えてくださった高知大学国際交流室および人文社会科学部事務室の皆様、そして共に参加した仲間たちにも感謝いたします。皆様のおかげで、かけがえのない学びの機会を得ることができました。

哈爾濱スタディツアーに参加して

人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース

池上 吉乃

はじめに

今回、スタディツアーに参加し、日本とは違う文化を体験したり、中国の個性が現れている建築様式等を実際に見たりすることができた。中でも、建物の屋根や公共施設の前に多くの動物の像や装飾を見かけたことが印象的だった。また、これらの生き物の一部は日本では古くから縁起や長寿などを表す意味を持つものであった。これを踏まえ、本レポートでは、万里の長城や故宮の屋根の置物、故宮内、哈爾濱の様々な建物前に設置された獅子像を取り上げ、それぞれの意味と日本と比べて感じたことについて考察する。

1. 万里の長城と故宮の屋根の置物について

北京滞在中、1日目に訪れた万里の長城と、2日目に訪れた故宮の建築を見ると、屋根の棟の部分に小さな動物の置物が並べられているのが分かる。これらの数は建物によって異なり、万里の長城では1体程度であったのに対し、故宮では最も格式の高い建物に10体もの像が並んでいた。このような像は「走獣」と呼ばれている。

走獣の先頭には仙人があり、その後に、龍、鳳、獅子、海馬、天馬、押魚……というように神話上の霊獣が続き、それぞれの生き物に火除けや邪気払い、天下泰平などの意味がある。この配列や数は建築物の用途や位階を象徴するために重要であり、特に故宮のような皇帝の建築では、走獣の数が多いほどその権威と尊厳を示すものとされ、10体設置してあるこの建物は最も高貴な建物であることを表している。

このことから、屋根の上に配置された霊獣たちの置物には建物の美しさを表現する役割だけでなく、格式の高さや神話等の信仰を表現していると考ええる。



図1 万里の長城



図2 故宮

3. 哈爾濱、故宮内の獅子像について

故宮内や哈爾濱市内の銀行やホテルの前で「獅子」の像を多く見かけた。それらは雌雄で2対1対として設置されており、個体によって少しずつ違いはあるものの、右側の雄獅子は玉を押さえ、左側の雌獅子は子獅子を抱いている。

獅子には、建物を守護し邪気を払うといわれている他にも、身分や権勢の象徴とされている。今日銀行や商店前に置かれている理由としては、獅子には平安や吉祥をもたらすだけでなく財ももたらすとされているからである。また、獅子という動物は、インドから仏教とともに伝来した外来種であるが、中国文化に取り込まれ、様々な逸話とともに神獣となり、皇帝の権威を象徴する存在へと変化したものである。

このことから、哈爾濱や故宮の獅子は、中国の昔からの信仰や美意識を今に伝えるとともに、現在の人々も無意識のうちにその守護と吉祥の意味を大切にしていることを表していると考ええる。



図3 故宮内の獅子



図4 哈爾濱、ホテル前の獅子

3. 日本との比較

これらを調べ、中国では動物の姿に人々の願いや決まりが深く結びついているということを感じた。日本にも神社の狛犬のように、似ているものは存在している。しかし、中国の方がそれらを国家などの大きなスケールで考えられていることが印象的だった。特に故宮の走獣のように、建物の格式の高さによって配置や数が決められるという発想は、日本の建築では見られない特徴であると考ええる。

このように、両国に共通する動物信仰であっても、隣国同士でも異なる考え方を持っていることが分かる。特に、建物の前に置物を配置することは日本ではなかなか見ることがないため、中国では日本よりも、伝承などを大切にする国民性があるのかもしれないと考えた。

おわりに

今回のスタディツアーを通して、中国の建築や装飾に見られる動物の像が、成す意味について深く学ぶことができた。万里の長城や故宮の走獣、哈爾濱や故宮内の獅子像など、それぞれの配置や形には意味があり、建物そのものが人々の願いや世界観を表しているのだとわかった。

今回の経験は、建物の装飾品という今まで気にしたことのないことを詳しく知る貴重な機会となった。また海外旅行に行く際に、建物や町中のふとしたところに目を配りたいと

思う。

参考文献

Lily Sun China town /Traditional Chinese Roof/ <https://www.lilysunchinatours.com/Ancient-Architecture/Traditional-Chinese-Roof/> (2025 年 10 月 31 日最終閲覧)

川野明正「中国獅子像の地方類型と分布―その 1・北獅篇」(『人文学報』513、2017)

初めての海外、初めての中国

高知大学人文社会科学部人文社会科学科人文科学コース

山崎 智可

○目次

- ・ 目的
- ・ 日本との違い
- ・ 今後の生活
- ・ コラム

目的

私がなぜスタディツアーに参加したかという、今後の学びに活かしたいと思ったからだ。私は「地理学」や「文化人類学」の分野に興味があり、それらはフィールドワークで学ぶものであるから、一年生のうちに日本と他国との差というのを感じてみたいと思ったのだ。また、中学生のころから海外へ行ってみたいと思っていたが、今まで時間や費用の問題で海外へ行く機会がなかったため、今活動が好機だと思った。

日本との違い

日本と中国との異なる部分について特に感じたことは、お店の雰囲気の違いだ。今回中国では食べ物屋やお土産屋、屋台などを中心に回ったが、それぞれ少しずつ日本とは違う箇所があった。

例えば、食べ物屋やお土産屋では商品の量り売りが非常に多かった。特にお菓子や比較的小さな食品が「500 グラム 10 元」などのような表記で並んでいるのを何回も見た。小さいお菓子は、日本では駄菓子屋で売られているイメージがあるが、量り売りは滅多に見なかったため、とても新鮮に感じた。また、中国ではお菓子の消費が日本よりもっと身近で、子どもから大人まで年齢を問わず人気なのかな



とも思った。

また、屋台では蚕の幼虫や豚の尻尾、羊肉など、日本ではほとんど見られないものが食品として並んでいた。中でも驚いたのは、昆虫が串に刺されて何本も用意されていたことだ。せっかく海外へ出たのだから、日本では食べられないものをたくさん食べようと思って、私は 35 元のタランチュラを食べてみた。本来、蜘蛛は全く得意ではないのだが、「ここでは食べ物として扱われているのか」ということによって、不思議と食べられた。しっかり揚げて

調理されていたので、エビなどの甲殻類のような、香ばしい美味しい味がした。正直、もう一度食べてみたいと思っている。

今後の生活

今回、海外へ行って思ったことは、「海外でも意外と生きていけるのではないか」だ。期間が短かったことや、教授が引率してくださっていたことによって危ない経験をするのがなかっただけかもしれないが、寝床が確保でき食べ物が買えるならば可能性はゼロパーセントではないのかなと感じた。

私は、このスタディツアーを通して、もっとたくさんの国や地域に行ってみたいという気持ちが強くなった。日本国内でも、旅行などで遠出するときはドキドキするのだから、今後、海外へ行くのに不安がなくなるわけではないだろう。しかし、私は現地の人と話をし、自分の言葉が伝わったとき本当に嬉しかったのだ。この、コミュニケーションが取れる喜びは、きっと海外へ行く一つの重要な要素となっていると思う。また、私は写真を撮ることも大好きで、中国では見たことのない風景ばかりだったから、写真を撮っていてとても楽しかった。だから、今回のスタディツアーをきっかけに、これからも海外へたくさん行きたいと思っている。



最後に

私は散歩が好きで、写真を撮ることも好きなのだが、歩いているときは、よく足元や風景を見ている。そして中国では、タバコの吸い殻がたくさん落ちていたことが気になっていた。落ちていたタバコのほとんどは、日本ではあまり見ないカラフルなものだった。私は地面に落ちているタバコの写真をたくさん撮った。



移動するためのタクシーを待っていたとき、ちょうどタバコを吸っている人に遭遇したという場面があった。その人は、吸い終わった後に地面に捨てたのだが、私がすかさずカメラを構えると「なんだこの子は」という感じの顔をされてしまった。また、これを見ていた他の喫煙者は少し離れてタバコを捨てていた。

哈爾濱・北京スタディーツアーに参加して

人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース

筒井 優衣愛

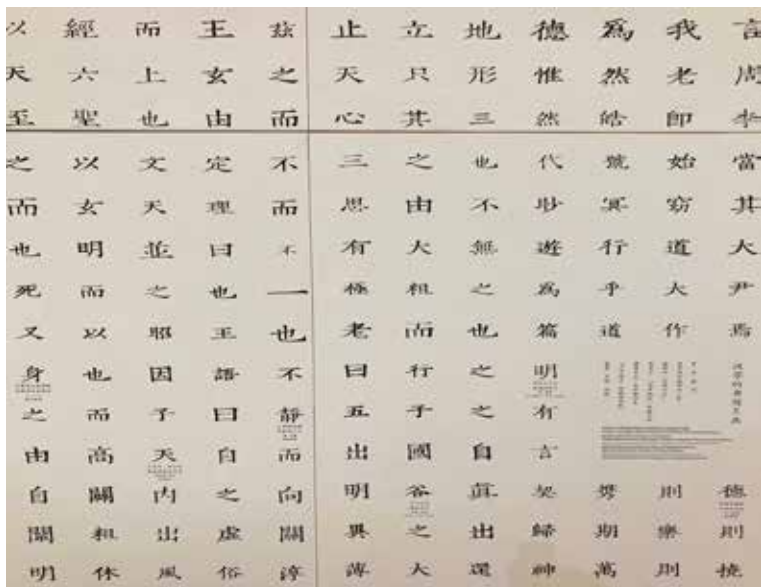
今回哈爾濱・北京スタディーツアーに参加し、多くの学びを得た。初めての海外渡航体験だったので不安もあったが、日本とは違った音、匂い、交通事情に驚きつつ楽しむことができた。

前半の哈爾濱での活動では、哈爾濱師範大学・東語学院の学生さん達にお世話になり、パンダを見たり聖ソフィア大聖堂や中央道を観光したりした。自由行動時間であった師範大学夜市では、偶然にも学生さん達と会うことができ、おすすめの屋台や買い物の方法を教えてもらうことができた。大学・大学院の成果発表会、交流会では、現地での日本語の習得方法を知ることができ、これから海外での日本語教員を目指す者として非常に学びの多い内容だった。交流会では互いの国の伝統遊びを体験することができ、両国の学生同士の距離が縮まったように感じた。

後半の北京での活動では、万里の長城と故宮を観光し、中国の歴史を体感することができた。万里の長城では東側が比較的登りやすく、頂上からの景色は圧巻だった。城壁の左右を見渡すと、大昔にはこの地を境に民族が分かれていたのだという思いが込み上げ、非常に感慨深かった。

中でもこの北京観光で印象的だったのは故宮だ。故宮博物館内に足を踏み入れた時の景色はもちろん圧倒的なものだったが、特に心を動かされたのは漢字館だった。





このように最初は記号として象形的役割が主だったが、時代を経るごとに役割の種類を増やし、体系的に効率良く物事を書き表すことができるようになった。そして3枚目の写真の時代に「漢文」として日本に伝えられ、この時代の漢字が日本で定着した。中国ではその後も発展を続け、簡体字や繁体字が定着するようになった。中国語を学習する際に使われている漢字の形が異なっていて習得が難しく感じる理由は、日本語が字形の異なる時代の漢字を「輸入した」ためであると考えられる。

今回の哈爾濱・北京スタディーツアーを通して主に言語面で日本との繋がりを感じることができ、非常に充実したものとなった。今度個人で旅行に行く際は、もう少し中国の歴史を掘り下げて勉強した上で観光したいと思った。

2025 年香港スタディツアー報告

高橋 俊

2025 年 12 月 25 日～29 日、香港にてスタディツアーを行った。引率者は、川本真浩と高橋である。

今回は、事前指導で参加者の興味関心について事前調査を行ったうえで、現地に赴いた。ローンボウルズを中心にしつつ、香港の町並みや歴史的建造物を参観し、また「香港史」をどのように提示・展示しているかを各種博物館で調査した。さらに、「隣町」である深圳へも足を運び、両者がいかに同じなのか／違うのかについても検討を行った。事後指導としては成果報告会を行った。

参加者は 1 名であったが、そのレポートは極めて詳細、かつ高レベルなものである。ぜひ、このまま継続してこの方面の知識を伸ばして欲しい。

【スケジュール】

- 12 月 25 日 関西国際空港→香港
- 12 月 26 日 博物館参観
- 12 月 27 日 ローンボウルズ
- 12 月 28 日 深圳探訪
- 12 月 29 日 香港→関西国際空港

【費用（学生 1 名）】

- 航空券：65,000 円
- 宿泊費：15,000 円×4 泊＝60,000 円
- その他（参観費・香港移動費等）：30,000 円
- 合計：155,000 円



語らぬ「証人」に耳をすませば

— 2025年12月の香港等におけるモノを介した歴史の伝え方 —

人文社会科学部人文社会科学科

人文科学コース3年

学籍番号：B231G085X 廣瀬奏人

はじめに

本稿は、2025年12月25日から同年12月29日まで香港特別行政区⁽¹⁾と中華人民共和国深圳市⁽²⁾で実施した国際社会実習（スタディツアー）の報告を目的としたものである。はじめに、調査テーマについて述べておこう。香港を訪問した過去のスタディツアーでもモノ—街や建造物—に着目した報告があった（畑山、2018・岩佐、2024・山口、2024）。

今回もモノをテーマとした調査を行った。本稿でのモノとは、建造物や展示物、シンボルなどありとあらゆる存在を指す。また、本稿での「証人」とはモノを指す比喩表現である。モノに着目した理由は、モノが突如として自らの来歴を話し出すことはなく、自らの価値を説明することもないが、博物館の展示などでモノを説明するとき、どれほど客観的に説明しようとしても、そこには必ずヒトの認識が入り込むからである。つまり、モノの説明にはその時代の歴史認識や説明者の意図が少なからず入り込んでおり、それを調査することで現在の認識が浮かび上がるのではないかと考えたからである。

さらに、調査では写真を撮影したが、そこに写り込んだモノは2025年12月に存在していたことを示す記録となるので、執筆者が見た香港を可能な限り分析し記録しておこうと考えるからである。なお、本稿も執筆者の認識によって「切り取られた2025年末の香港」であることを明記しておく。

さて、2025年はアジア太平洋戦争が終結してから80年目であった。メディアでも報道されている通り、日本において戦争経験者の高齢化が進行し、歴史の継承が困難になってきている⁽³⁾ことは周知のとおりである。

話を香港に戻そう。香港がイギリスから中国へと返還されたのは1997年のことであり、アジア太平洋戦争と比較すれば近年のことである。しかし、いずれ植民地統治下の香港やそれ以前の香港を伝えることになるのは人ではなくモノということになるだろう。そこで、2025年12月時点でモノが歴史をどのように伝えているのか、について調査したのである。

本稿では、香港及び深圳で見聞したモノを建造物、博物館展示、そのほかの3つに分類しモノを介した伝達について、展示方法などの視点から報告する。しかるのちに、日本におけるモノ（歴史的建造物）を介した歴史伝達について高知市朝倉を主題に考えてゆく。

I 建造物

本章では、歴史を建造物がどのように歴史を伝えているのか、またどのように活用されているのかについて報告する。調査では、セントジョンス教会、大館、九龍ボーリングクラブ、香港文物探知館など多くの歴史的建造物を訪問した。本章で具体的に扱う建造物は、セントジョンス教会と大館であり、どちらも香港の建造物である。

第1節 セントジョンズ教会 (St. John's cathedral)

セントジョンズ教会は、1849年に創建された教会で法定古跡に指定されている。1941年から1945年までのアジア太平洋戦争で日本軍が香港を占領しているときは、日本人社会のためのクラブハウスと公会堂に転用された（Stephen,2001）過去がある。

19世紀にイギリスの植民地などで「復活」したイギリス・ゴシック様式が遺されていることやイギリス王室の徽章などイギリス統治下時代の名残が教会に遺されていることが先行研究で指摘されている（James,2019）ので、これらを確認するために訪問した。

教会内には、日本語のパンフレット（「聖ヨハネ大聖堂 歴史を巡る」）など各国語の案内があり、自由に持ち帰ることができた。そのパンフレットには、教会の歴史や教会内の装飾などについて歴史の観点から解説されている。

パンフレットを頼りにセントジョンズ教会の内外を巡検していると、確かにイギリス植民地時代の名残が確認できた。具体的に、元香港総督の紋章（写真⁽⁴⁾1、2）やヴィクトリア女王のイニシャル「VR」（写真3）、会衆席のイギリス王室の紋章などである。内部は写真で記録することはできていない（撮影禁止による）。



写真1 元香港総督の紋章：ジョン・デイビス卿



写真2 元香港総督の紋章：ジョージ・ボナム卿



写真3 ヴィクトリア女王のイニシャル：VR

訪問時も聖ミカエル礼拝堂（St. Micheal Chapel）で礼拝が行われていた。また、キリストの誕生を表現した模型があり、クリスマス色に染まった様子を見学することができた。香港のガイドブックにも掲載されている場所であり、教会の目の前に土産物店があるが、観光地であるという印象はなく、観光客もほとんどいなかった。

第2節 大館（Tai Kwan）

大館とは、2018年にセントラル警察署（Central Police Station）・裁判所（Central Magistracy）・ヴィクトリア監獄（Victoria Prison）から構成される旧司法複合施設に開館した施設であり、「香港の新しいアートスペースとしても人気を集めている」といわれている施設である（伊藤、2019）。

伊藤氏が指摘するように、施設内には歴史の展示室や監獄の一部をそのまま遺した場所も多数存在しているが、施設中心部の屋外にはクリスマスツリーが展示され、現代アートの展示もあった。特に、現代アートについては団体旅行客と思われる多くの集団が記念撮影をしていた。日本の修学旅行生とみられる姿も見られたが、彼女らが歴史に関心をもっているというよりは、「SNSを意識した写真」をどう撮るかということに関心をもっているように感じた。

歴史の展示室を見学したが、そこにいるのは数名で、多くの人は見向きもしていないようであった。説明板もいたるところに掲げられ、そこがどのような場所であったのかについて学習できるように工夫されているが、それに興味を示す人は少なく完全に観光地化しているように思われた。観光地化は、そこに興味を持ち、訪問し歴史や建造物が遺されている意義について少しでも考えてみるという契機につながるかもしれないが、大館はアートなどで人気を集めている観光に振り切った場所という印象が強く残った。

しかし、監獄をレストランに改装して営業するなどの工夫もあった。監獄で営業しているカフェでは、「注文する者以外、お断り」という旨が入り口に掲げられていた。営業してゆく中で、客以外が長居することは迷惑であるためであろう。文化財で食事ができるということは、文化財保護や歴史を考える契機になると思う。しかし、カフェの看板にみられるように入店した者が写真を撮り、注文せずに帰ってゆくこともあると推測した。

香港に限らず、文化財としての側面と観光地としての側面のバランスをとることが求められているように感じられた。

II 博物館展示

本章では、香港及び深圳の博物館展示について報告する。訪問した博物館の中から香港の2つの博物館と深圳の博物館について見聞してきた内容及び執筆者の私見を述べてゆく。なお、今回のスタディツアーで訪問した博物館施設は、大館、香港文物探知館、香港歴史博物館、香港海事博物館、深圳博物館である。

第1節 香港の博物館

第1項 香港文物探知館

香港文物探知館は、現地整備の不可能な遺跡から出土した文物を保管し、学術価値の高い資料を展示するために2005年に開館した考古学資料館であり、本館の建物は、1910年に建築されたイギリス軍の兵舎である（鄒、2015）。

この博物館では、唐の企画展が実施されていた。企画展では、フラッシュを焚かない撮影が許可されており、見学者は各自写真で記録していた。展示物はすべてガラスケースに入れられ、見学者は手に取ることができないようになっていたためであろうか、椅子に腰かけて模写をしている男性の姿があった。また、重ね押すことで一つの絵柄が完成するスタンプが展示室内に設置され、小学生くらいの子どもも年配の見学者も「記念に」とスタンプを押している姿が印象的であった。

建築と考古学の常設展も見学した。ハンズオン展示や床を皿で埋め尽くしその上にガラスを貼ることで見学者が出土状況を追体験できるような展示があった。また、シロアリの食害などに関する展示

や文化財保護の展示もあり、文化財を未来にどのように伝えてゆくのかを見学者が考える展示となっていた。

鄒海寧氏はこの博物館の問題点として、九龍半島の商業地区のチムサーチョイにある九龍公園の中に位置しており観光にとって便利な立地であるにもかかわらず、団体旅行による来館者が少ないことを挙げている（鄒、2018）。確かに、訪問した日（12月26日）に団体旅行客らしき人物は見当たらなかった。しかし、特別展のみならず常設展にも個人の見学者が多数おり、展示物の前で記念撮影をしている若者も見られたので、団体旅行の来館者に拘る必要はあるのであろうかと感じた。

第2項 香港歴史博物館

香港歴史博物館は撮影が禁止されていたので、写真は1枚もない。しかし、展示方法は文化財保護の観点から変化し、かつ時代によって求められる展示手法なども変化してゆくと考えるので、「記録する」という意味から博物館での見聞について報告しておきたい。

香港歴史博物館は、「香港の文化の保存と発揚」という目的で香港における最初の歴史博物館として九龍半島のサムサーチョイ（尖沙咀）に位置している1998年に開館した博物館で、香港の歴史と文化について系統的に資料収集・研究し、2001年以来「香港故事」という常設展を通年行っている施設である（鄒、2018）。

この博物館では訪問当時、「国家安全法」の企画展（《香港國安法》公布實施5周年專題展覽）が開催されていた。その展示も見学したが、キャプションがほぼすべて中国語で、観光客向けの展示ではなかった。特に、中国の国旗を掲げ国歌を再生し楽譜を見せる展示と香港の返還式の映像を放映している展示が印象に残った。独立行政区であるとはいえ、香港は中国の一部であるという実感が強める展示であった。エドワード・ヴィッカーズは、地域史に関する公式見解を策定するための焦点は圧倒的に香港と中国の関係に向けられてきたと述べている（Vickers, 2019）。ヴィッカーズ氏が執筆したときよりもその傾向が強まった結果、香港と中国の关系到焦点を当てた観光客向けではない企画展が成立し、観光客向けではない展示になったと推測する。

常設展では、モノや映像を用いた展示がされているが、ユニークな展示もあった。それは、モノにエピソードをつけ、写真とキャプションをパネルで示し、モノを使用していた人が語っているように展示する方法である。見学者は、モノの前に立ち、言語選択のボタンを押すとそのエピソードを聞くことができる仕組み（図1）である。言語は英語・広東語・普通話から選択することができる。執筆者も英語で聞いてみたが、周囲で話声と複数の映像展示の音声、自分が聞きたい展示など複数の音声が広東語、普通話、英語で聞こえてくるので脳内の処理が追い付かなかった。言葉で表現するならば、展示スピーカーから聞こえる音声は「なにか言っている」ことがわかる程度の音量なので、音が混ざり合い、ほとんど聞き取れない。ネイティブであれば、多少理解できるのかもしれない。見学した後は、映像や音声による展示が多く、「疲れた」という感じが残った。

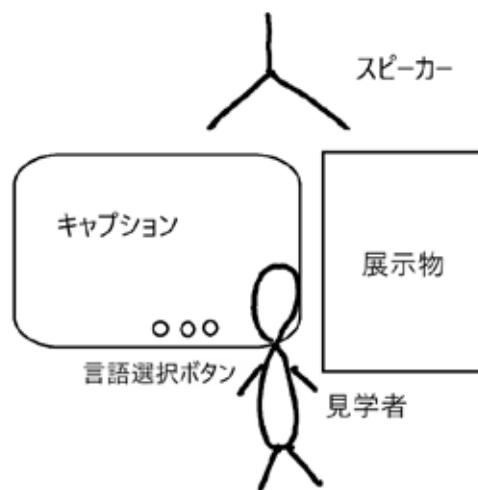


図1 香港歴史博物館における展示方法イメージ

音声でエピソードを紹介する展示手法はモノが経験した歴史を伝達する上で有効なように思われるが、果たしてそうであろうか。録音されている声は多言語なので、使用者の声そのものではない。博物館の意図で使用者の言葉や意図が変更されていてもそれを知るすべは見学者にはない。したがって、使用者の声をそのまま展示に活かすことができれば、モノをエピソード化して展示する手法は有効であると考ええる。

第2節 深圳博物館（中国・深圳）

深圳博物館は、深圳博物館は、1981年に深圳初の文化博物館として開館し、5つの常設展示室と2つのテーマ型展示室を有する。展示物は、自然、歴史、民俗など多岐にわたる。

この博物館は展示室内の見学順は決まっているが、どの展示室から観覧するかは見学者に委ねられている。見学者は展示室内では基本的に順序に従い、展示室を見学してゆくことになる。特徴的であったのは、展示室の一部がジオラマ展示となっており、来館者はまるでタイムスリップしたかのように感じながら見学する（写真4）。すべての展示物ではないが、現代では工事をしている効果音を再生し、火花は電球を用いて再現するなどの工夫があった。



写真4 ジオラマ展示

そこには、景観を損なわないようにキャプションが付けられており、ある時代の「街角」をそのまま現代に移設したような印象を受けた（写真5）。また、展示物にはキャプションが付されているが、日

本との戦争に関係する展示物であっても「そのモノが何なのか」がわかるのみで、具体的な説明はされていないことが多かった。その例として「抗日戦争」期における日本軍の軍刀（写真6）を掲げる。キャプションを確認すると、「日本軍刀（Japanese sabers）」と記されているのみである。そのため、来館者（＝展示を観る人）によって展示の意味は変化し、何通りもの捉え方を促すことができると考えた。

一方で、具体的な説明をしないということについて考え方を変えれば、モノを見学した者の思想や知識の差によって事実ではない認識を生み出すことにもなると考えた。学術用語を用いたキャプションや説明が長いキャプションはモノに対する説明を詳細にできる。しかし、そのようなキャプションが「歴史を正しく知ってもらいたいという博物館や学芸員側の配慮が強く反映されているとも言えるが、一方的な知識の押し付けとも言える」と評価される（鈴木、2019）。

どれほど詳細にキャプションに記すのか、どのようにすれば資料から読み取り感じたことを自身の知識と結び付けることができるのか。今後も考えてゆく必要がある。



写真5 ジオラマ展示とそのキャプション



写真6 深圳博物館における日本軍刀の展示（「抗日戦争」の展示）

さて、現代の展示では「賛美」的な側面が強く、説明もそれまでの展示と比較して詳しく記されていた。そのため、現代の展示はイデオロギー色が強いという印象を受けた。要するに、博物館側の「押しつけ」になっている。この点は、香港歴史博物館の特別展とも共通しているといえよう。特に、鄧小平に関する展示に見学者は釘付けになっており、ガイドの説明を聞きながら記念撮影する者が多くいた。

来館者は、深圳の歴史や民俗に関心がある者だけではない。子ども連れの家族や私のような観光客もいる。自然の展示室には動物の剥製が展示されており、この展示室は子ども連れの来館者が多かった。自然の展示室は、まるで動物園のような充実感があるので、子どもは十分楽しむことができると思うが、博物館展示の大部分はいわゆる人文社会科学の領域である。

その展示は大人向けなのであろうか。確かに、子どもにとっては難しい内容も含まれている。しかし、子どもも展示を「観る」ことができる仕掛けがあった。それはスタンプである。各展示室の最後に机が置かれ、その上に展示室を象徴する展示物のスタンプが押印できるようになっていた。展示室を出口から入って見学することは注意喚起がありほぼできないので、入り口から順に見学してゆくことになる。よって、子どもも例外ではなく展示は入り口から見学するので、見学後にスタンプを押印できる仕組みである。

展示の内容を理解することは困難であっても、スタンプを押印すれば事実上、展示室を「見学した」ことになる。子どもが博物館に興味を持つきっかけ—将来、受け手となる契機—を作っている取り組みといえる。

このように大人だけではなく子どもも楽しむことができる仕掛けをしていることで、博物館の展示に興味を持たせる工夫を施していると考えられる。つまり、歴史を伝えられる側—受け手—を獲得する仕組みである。

第3節 小括

本章では、香港及び深圳の博物館展示について報告した。どの館もそれぞれに特色があり、それぞれの魅力があったが、映像を多用し、かつ音声を再生し続けているという見ているだけで「疲れる」展示もあった。

モノを介して説明することは学芸員の仕事であり、それによりモノにモノ以上の価値を生み出す。モノに対してどのような価値づけや意味付けをしてゆくのか、見学者の感想や解釈に大きな影響を及ぼすことを実感できた。また、詳細を紹介することはできなかったが香港海事博物館も訪問した。ここでは、舟や航海のみの展示ではなく、温暖化の問題など現代社会の課題についても展示があった。

博物館は過去の文物を意味付け、展示すればよいのではなく、見学者が展示を踏まえて、今を未来につなげてゆくことができる工夫が必要であると強く感じた。また大人の見学者のみを対象とするのではなく、展示室内にスタンプを設けるなど子どもも展示を楽しむことができるようにすることが求められていると考えた。香港及び深圳の博物館で見て・聞いて・体験してきたことを学芸員資格取得や日々の生活に活かしてゆく。

III そのほか—龍・記録手段・香港—

第1節 龍の表象

本節では、香港内における龍の表象について報告する。調査は、香港を巡検する中で龍を発見すればその度に写真に記録してゆく方法で行った。調査の分析には、平木茂氏の論考（平木、2012）を用いる。

平木氏は、中国龍と日本龍について絵画資料から分析され、中国龍は、皇帝のシンボルとして完成し、皇帝の龍のみ5本爪であって、分析で登場するその他の龍は4本爪である。また、「龍の全身は、大きくうねらせて口を開いて吼えているとともに爪を立てて戦闘的で躍動感に満ちている」とする。一方で、日本龍の「口は、閉ざされて、爪は、3本爪であり戦闘感、感じられない」とする（平木、2012）。

前述した方法で調査を行った結果、香港の龍の多くは典型的な中国龍であったが、香港フットボールクラブのシンボルとして用いられている龍はウェールズ国旗に酷似する龍であり、フットボールなどがイギリスから持ち込まれたものであることを象徴しているように思われた。以下に香港で記録した龍の写真を掲げる（写真7）。



第3節 「香港」はどのような地域か—香港？Hong Kong？；思い出も悲しみも眠る街—

本節では香港をモノと仮定して、今回の調査で見聞した内容から香港について考えてみる。香港に到着しホテルに向かうバスの車内で目にした光景は、東南アジア系の使用人たちが歩道に敷物を敷いて宴会をし、物品を販売している様子であった。使用人たちは出稼ぎに来ているようで、クリスマスの休暇を同郷の仲間と楽しんでいる様子で、楽しそうにしていた。しかし、「観光客」として訪問した執筆者の目には、どこかかつての支配と被支配という関係が続いているような光景として映った。

香港では、広東語、普通話、英語が話されており、ホテルの従業員や飲食店は英語が通じた。とはいえ、かつてイギリスから中国に返還される直前の香港を訪問した執筆者の両親は「どこでも英語が通じた」と話していたが、今回スーパーで買物をしていた際、英語で店員に話しかけたところ、英語が話せない様子であった。

また、自動車は右ハンドル、左側通行でイギリスと同じ方式であった。これに加えて、街には2階建てのトラムとバスが走行していたし、階数表示も日本の1階はG（Ground floor）と表記され、日本の2階は1階と表記されていた。街にはイギリス統治下の名残が遺されていた。しかし、前述したように龍の表象については中国の影響が強く、博物館展示も中国を「賛美」している展示が多かった。

深圳は、自動車は左ハンドル、右側通行であったし、地下鉄の保安検査でも英語で会話することはできなかった。それに加えて、街には監視カメラがいたるところに設置されており、「観光客」として訪問した執筆者は緊張して巡検していた。

香港と深圳はMTRや高速船などの交通手段で往来することができるが、それぞれに入国審査・出国審査があり、同じ国とは言え「国境」が存在していた。香港はかつてのイギリスとしての姿と中国の姿が混在している地域であると感じた。

香港の匂いについて感じたことを述べておこう。空港では「まるで日本の春のようだ」と感じたが、宿泊した銅鑼湾では香辛料や自動車の排気ガス、店頭に並んだ鮮魚や精肉など様々なものが混ざった言葉では言い表しにくいものであった。一方で、深圳の匂いは何度もマスクを外して嗅いでみたが、何も感じなかった。香港の街は何とも言うことができない独特な匂いが漂っていた。

テレサ・テン（鄧麗君）はかつて「香港～Hong Kong～」⁽⁵⁾という歌で、「星屑を地上に蒔いた この街のどこかに 思い出も悲しみさえも いまは眠っている」と歌った。香港はイギリスの植民地時代の影響をとどめていたり、中国の影響が強いモノが存在していたりする。そして、東南アジア系の人々が出稼ぎなどの目的で使用人として就労していたりもする。それゆえ、「香港とは何か」と聞かれれば、2025年末の香港は、文化的、歴史的に様々なものが思い出や悲しみとともに混在した地域と答える。

第4節 小括

ここまで、そのほかに分類した調査内容について報告してきた。調査を実施した2025年12月末の香港は中国化しつつも、イギリスの名残を色濃く伝えていると感じた。なぜなら、英語を媒介言語にした会話が多くの場所で成立するし、交通を見てもイギリス式であって、深圳のように街中に監視カメラが設置されている様子は見られなかったからである。一方で、博物館展示や龍の表象は中国の影響が強いと感じられた。

街の様子も博物館の展示も時代に合わせて、刻々と変化してゆくものである。むしろ、日々変化し続けているといった方が適切かもしれない。混沌として先を見通すことができない世界情勢の中で香港が今後どのように変化してゆくのか、注目してゆきたい。

IV 日本の地域社会を再考する—高知市朝倉の文化財を主題にして—

本章では、日本におけるモノを介した歴史の伝達について地域社会を取り上げ考えてゆく。本実習の実施概要には「^{ローカル}地域社会と^{グローバル}世界について考える」とある。そこで、高知大学の朝倉キャンパスが所在する高知市朝倉—地域社会—の文化財を取り上げ、香港と深圳—世界—で見聞し、考えたことを中心にして述べてゆくことにする。

香港では、歴史的建造物であればパネルが設置されていた。また、海岸線であったことを示すパネルも街に設置され、信号待ちの歩行者が見ることができるようになっていた。このように、香港は地域の歴史を考えるためのヒントが数多く設置されていた。

さて、朝倉には、朝倉神社や朝倉城をはじめとして多様な時代の歴史を伝えるモノが所在している。しかし、どれほどの人がそのことを意識して生活しているのだろうか。

執筆者も高知大学に入学して、朝倉で生活をし、調べて初めて知ったモノも多い。巡検しているとそれが歴史的建造物であることを示している場合もあるが、何も示されていない場合もある。そのモノを未来に伝えようとしたとき、どのような対応ができるのだろうか。本稿で報告してきた「モノを介した伝え方」に関連して考えてゆこう。

地域は観光地である以前に、地域の人々にとって生活の場なので、地域の遺産を観光地化して適応せよとは言えない。しかし、このまま歴史的建造物であることを伏せたまま—関心が向けられにくい状態で—年月が経過すれば、人々の関心が寄せられなくなり、放置されてゆくであろう。

高知大学の西隣に現存している国の登録有形文化財である旧陸軍歩兵第四四連隊弾薬庫及び講堂がある。敷地の中に入ることができないので、塀越しに見学することしか執筆者は行っていない。この文化財について、内部調査や発掘調査、ヒアリング調査による証言などを記録した報告書（高知大学弾薬庫調査班、2016）が発行され、オーテピアなどで所蔵・公開されているが、ウェブ上での閲覧、ダウンロードはできない。加えて、周囲にそれが文化財であることを示すものの存在があることを執筆者は知らない。

高知県歴史文化財課が「旧陸軍歩兵第四四連隊弾薬庫及び講堂保存活用計画（案）」を公開し、2025年8月12日から同年9月10日まで意見を公募したが、提出意見は0件であったことが公表した⁽⁵⁾。この結果は、活用計画に何ら問題が存在しなかったことを示しているとも捉えられるが、一方で人々の「関心のなさ」が露呈したとも捉えられよう。執筆者は本稿執筆中に意見公募があったことを知った。

地域の遺産が放置され、形として見えなくなれば、調査も歴史の伝達も行いにくくなる。そのような事態が発生する前に、何らかの対応をしてゆく必要がある。例えば、香港でみたようにパネルを設置することが考えられる。

旧陸軍歩兵第四四連隊弾薬庫及び講堂について言及すると活用計画が定められているので、計画が実現すれば「第四四連隊及び関連部隊の歴史や時代背景について理解し、実際に残された建造物を見学することで、「平和の尊さ」を感じることができる場」（高知県文化生活部歴史文化財課、2025）として機能できると想像する。とにもかくにも、そのモノが何であるのかを明確に示すこと、活用計画を定め実行することが地域の遺産—モノが経験した歴史—を伝えるための第一歩となろう。

執筆者も含めて「生活の場にかつて何があったのだろう」と考え、いつもの街に、いつもとは少し違う視点から目を向けてゆく必要がある。そうすることで、地域というモノがどのような歴史を辿って、それぞれの時代でどのような意味付けがあったのかが見えてくるのではなかろうか。その手がかりとするためにも、何らかの手段で歴史的意義をもつものであることを示す必要があると考える。

おわりに

本稿は、執筆者が切り取った2025年12月末の香港や深圳についてモノを介した伝え方という視点

から報告するものであった。そして、それを踏まえて地域社会について考えることも目的であった。しかし、モノが歴史をどのように伝えているのかについての話から博物館の展示方法、香港についてなど、テーマが広すぎた感がある。とはいえ、初めて海外を訪問した執筆は、見るもの聞くものすべてが新鮮で本稿の内容は一部にすぎないことを付言しておきたい。

本稿では主に博物館や歴史的建造物の歴史伝達について述べてきたが、歴史を伝達される側やその手段についても言及したことで、一方向的にならないように配慮したつもりである。この点は、調査中から「可能な限り、客観的に記録しよう」と意識していたことであり、調査のフィールドノートにも記していた。

語らぬ「証人」に語らせているのは、間違いなく人である。見学者がその「証人」の声なき声に耳をすませば、モノに語らせた人が伝達したい内容や意図に気づくことができるのではなかろうか。

最後に本調査で残された課題を述べる。日本の地域社会における歴史伝達についても考えることができたが、博物館施設を比較することができなかった。調査できるのであれば、モノはどのように歴史を伝えるために利用されているのか、日本の博物館と香港の博物館、香港周辺都市の博物館とを比較検討してみたい。

執筆者の専攻は日本史学である。日本史学では「一国史観からの脱出」がよく言われているが、具体的にどのようにすればよいのか、わかっていなかった。しかし、今回の調査を通じて、海外で見聞したことから日本史について考えることがその一端になるのではないかと考えるようになった。香港が日本史に関わることになるのは近代になってからである。また、香港が歴史の「表舞台」に立つのも近代になってからである。

とはいえ、香港の先にある中国は古代から日本史と密接に関係しており、香港周辺にも近代以前の歴史があるので、地域や時代に拘ってはいは調査・研究をしてはならないと考えるようになった。日本にのみ目を向け研究するのではなく、海外にも目を向け、学際的・多角的な視点から日本史学の研究を進めてゆきたい。

本稿を執筆していると再び香港を訪れ継続して調査を行いたいという気持ちが湧いてきた。再び香港を訪れるとき、今回の調査で見学した展示もモノへ付されたエピソードも変化していると予想している。果たしてこの予想はどのような形で現実になるのであろうか。次回、香港を訪問するときも今回と同じ観点—モノはどのように歴史を伝達するのか—で調査をしたい。2025年とそのときとを比較することで香港を取り巻く情勢の変化を捉えることができよう。

目まぐるしく変化する世界情勢の中、2025年に香港及び深圳で調査できたことに感謝し、再び香港へ調査に出かけることができることを楽しみにして報告を終える。

註

(1) 以下、香港と表記する。

(2) 以下、中華人民共和国は中国、深圳市は深圳と表記する。

(3) 「絶えゆく戦争の口頭継承 終戦時 20 代は総人口の 0.3%未満...戦後世代も語り部に」『産経新聞』Web 版、2024 年 8 月 14 日付などである。

URL : <https://www.sankei.com/article/20240814-W7OGZRYSRNNH5CBLZURZTSG3JY/> 確認年月日は 2026 年 1 月 5 日である。

(4) 本稿で使用する写真、図は執筆者が撮影、作成したものである。

(5) テレサ・テン「香港～Hong Kong～」作詞：荒木とよひさ、作曲：三木たかし 発売日は 1995 年 6 月 7 日 URL : <https://www.uta-net.com/song/4216/> を閲覧した。確認年月日は 2026 年 1 月 18 日である。

(6) 高知県ウェブサイト「登録有形文化財（建造物）旧陸軍歩兵第四連隊弾薬庫及び講堂保存活用計画（案）について（意見公募期間：令和 7 年 8 月 12 日から令和 7 年 9 月 10 日まで 提出意見数：0 件）」公開年月日は 2025 年 10 月 6 日である。確認年月日は 2026 年 1 月 11 日である。

謝辞

スタディツアーを開講してくださった川本真浩先生・高橋俊先生、香港フットボールクラブなどを案内し内部の写真撮影を許可してくださった Johnney TSANG さん、ありがとうございました。

文献

- 伊藤俊祐（2019）「香港及びマカオのミュージアムのアクセシビリティ実践」『國學院大學博物館學紀要』巻 44、157～171 頁。
- 岩佐優希実（2024）「現存する遺物から考える九龍城砦の歴史」高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース『2023 年度 国際社会実習報告書』、53 頁。
- 高知県文化生活部歴史文化財課（2025）「登録有形文化財（建造物）旧陸軍歩兵第四四連隊弾薬庫及び講堂保存活用計画（案）」、2025 年 9 月 11 日公開。
- 高知大学弾薬庫調査班（2016）『旧陸軍歩兵第 44 連隊弾薬庫等調査報告書—国立印刷局高知出張所跡地調査による—』高知市教育委員会。
- 鄒海寧（2015）「香港における遺跡博物館」青木豊・鷹野光行編著『地域を活かす遺跡と博物館—遺跡博物館のいま—』同成社、95～106 頁。
- 鄒海寧（2018）「観光資源としての博物館—香港の公立博物館を例として—」青木豊・中村浩・前川公秀・落合知子編『博物館と観光—社会資源としての博物館論—』雄山閣、205～217 頁。
- 鈴木章生（2019）「博物館展示論」栗田秀法編著『現代博物館入門』ミネルヴァ書房、135～173 頁。
- 高橋彰・北本朝展・矢野桂司・佐藤弘隆・河角直美（2023）「景観写真のデジタルアーカイブと活用方法」『日本画像学会誌』第 62 巻第 1 号、23～34 頁。
- 平木茂（2012）「日本古傳藝術表現について—共通性と多様性—」『國士舘大學武徳紀要』巻 28、國士舘大學武道徳育研究所、53～76 頁。
- 畑山寧音（2018）「植民地時代を経た香港・マカオ」高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース『2017 年度 国際社会実習報告書』、72～75 頁。
- 山口明夏（2024）「香港 ST 成果報告」高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース『2023 年度 国際社会実習報告書』、52 頁。
- Edward Vickers（2019）“CAPITALISTS CAN DO NO WRONG : Selective memories of war and occupation in Hong Kong”, Mark R. Frost, Daniel Schumacher and Edward Vickers eds. *Remembering Asia's World War Two*, Routledge, pp.120~155.
- James Elliis （2019）“Anglican Indigenization and Contextualization in Colonial Hong Kong: Comparative Case Studies of St. John's Cathedral and St. Mary's Church” *MISSION STUDIES* 36 pp.219-246.
- Stephen Vines （2001）*The Story of St John's Cathedral* FormAsia Books.

資料

セントジョンス教会「聖ヨハネ大聖堂 歴史を巡る」

香港歴史博物館ウェブサイト URL : <https://hk.history.museum/en/web/mh/index.html> 最終閲覧年月日 : 2026 年 1 月 26 日

深圳博物館ウェブサイト URL : <https://www.shenzhenmuseum.com/> 最終閲覧年月日 : 2026 年 1 月 26 日